
高峰教授の探求～アルマスな彼女～

永倉千綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高峰教授の探求〜アルマスな彼女〜

【Nコード】

N3000M

【作者名】

永倉千綾

【あらすじ】

「高峰教授の探求」

世界に実在する超希少種族を研究するユーモラスでどこか謎めいた^{たかみねじゅん}大学教授高峰十三と真面目でクールな新人研究生^{とおのみお}遠野漣の師弟コンビが、超希少種族との様々な出会いを通して世界の真実を解明していく。

実在する異能の力を持つ超希少種族。独自の文化圏を形成し、異能とよばれる特殊な能力を持った彼らの存在は、一体何を意味してい

るのか。誰も知らない人類の本当の歴史とは何か。世界の真実が徐々に明らかにされて行く。

くアルマスな彼女く

く温泉とゴルフへGOくという高峰教授の「遠野君研究室歓迎企画」のもと皆神山を訪ねた二人は教授の好奇心から入った洞窟に閉じ込められてしまう。救助も期待できない静寂と暗闇の中で、遠野君は教授からアルマスについての驚くべき話を聞かされるのだが・・・。

1・我に光を！

そこには光もなく音もなく、ただ闇と静寂だけが世界を包んでいた。

ああ、いつからだろう・・・。

温かいミルクを片手に木漏れ日の光の中で、君の笑顔を見つめていたい。

そう思うようになったのは・・・。

できればスコーンの一つや二つもあつたほうがいい。

そよ風に乗って流れてくるビバルディに身を任せるのも悪くない。

ああ、君よ！ああ、光あれ！疎ましき静寂よ去れ！闇よさらば！あ

あ・・・君よ！

b y たかみね 高峰 じゅんせい 十三・・・。

「ああ君よ！じゃないですよ、教授。こんな時に勝手に黄昏ないでください。そして、意味不明の詩みたいなのをつぶやくのもやめて下さい。」

漆黒の闇の中からたしなめる様に若い男の声がした。

「おや！どこかで聞き覚えのあるその声は、遠野君ではないか。」

「私以外誰がいるって言うんですか！そもそも、教授についてきてこうなつたんですよ。」

遠野は少しぶ然とした様子でいった。

「まあ遠野君、落ち着くんじゃ。君の研究室入室おめでとう記念。」

「皆神山で温泉とゴルフへGO！」を企画して、いやがる君を無理やり連れてきたのは、確かに我輩に非がある。」

「私は、いやがりもしてないですし、無理やり連れてこられたのでありません。むしろ、日頃のつかれを癒して、のんびりゴルフでも楽しもうと思いい、それこそワクワクして来ましたよ。教授がへんな洞穴を見つけて、入ってみようなんて言わなければ・・・」

うなだれて、遠野がいった。

「止めればよかったではないか！」高峰教授は語気を強めた。

「止めましたよ！！私は！はつきりと！」さらに語気を強めて遠野が言い返した。

「ん！？そうじゃったかな。でもまあ、研究者としてはうずくではないか、ほれ探究心が。穴があつたら入ってみたいと思うのは人情ではないか。」

教授は軽く遠野をいなすと人情を引き合いに出した。

「ええ。その人情とやらのおかげで、急な崩落にあつて入り口が塞がれ、現在私達は真つ暗闇の洞窟に閉じ込められてしまっているわけですけどね。」

遠野の声は少しいやみっぽく聞こえた。

「やけにからむのう、遠野君。」

「からみたくもなりますよ。この絶望的な状況・・・。ひと気の全

くない山中のゴルフ場のしかもそのまたはずれの洞窟に誰に知られることもなく閉じ込められているんですよ。救助が来る確率を考えると背筋に氷柱がたちますよ。」

遠野はため息混じりに答えた。

「背筋に氷柱が立つとは、面白い表現だね。さすがは学院史上始まって以来の神童とよばれる遠野くんじゃ。こんなことなら我輩の薦めの通りハーバードのジャック教授の研究室に行っておけばよかったのう。なんで行かなかったんじゃ。」

「よしてください。確かに私は幼い頃より神童と呼ばれ、知識の豊富さに関しては私の右に出る者はいないと自負しております。ハーバードに行ったとしても恐らく私の知識を上回り、更なる探究心をかきたてさせる者は存在しないでしょう。」

「えらい自信じゃのう。」

「おそれいます。でも、高峰教授あなたは別です。あなたのマイノリティの研究（真希少種の研究）は私の持つ知識における既存の固定概念を完全に超越し新たな知識の認識を生み出します。私がこの大学に残ったのは高峰教授、あなたがいたからです。」

「やれやれじゃのう。面はゆいわ！あははは。」

「ただ……。そんな熱い研究への思いもこの洞窟でついでるかも・・。」

遠野が少し落胆した口調で言った後、しばしの沈黙が流れた。

「ところで、遠野君。アルマスというのを知っておるかね。」

沈黙の中、高峰教授が静かだが、とても落ち着きのある声で聞いた。

「アルマスですか。はい。ネアンデルタール人の生き残りとも言われ、コーカサス地方に生息し、毛深い全身に、言語は発達しておらず、かつてそのメスが現地人に捕らえられ使用人として飼われ、子供まで作らされたという。」

「うむ。さすがによく知っておるな。しかし、その記述はあくまで表面。半分しか的を得ておらん。」

「えっ！？と、いいますと・・・」

「正確にはネアンデルタール人の生き残りではなく末裔。コーカサス地方に生息の部分は正しい。毛深い全身は嘘で、我々と見た目は一緒。違いといえば耳に特徴があり、耳の先端が我々よりも尖がっている。言語は発達していないのではなく、しゃべれるがしゃべる必要がないので、普段は使用していないだけ。ちなみに、捕まったアルマスというのは本当のアルマスではなく、単なる密輸されたオランウータンで、できた子供というのは、その主人の愛人が、勝手に産んで置いていった子供じゃ。」

暗闇のなかで遠野の目は丸くなっていた。

「ほ、本当ですか！で、でもなんで教授はそんなことをご存知なんですか。」

「若い頃、研究でコーカサスに行ったことがあるからじゃよ。」

遠野の顔に少し安堵の表情が戻った。

「そうでしたか。実際に現地へ足を運んで、色々聞き込みをなされたんですね。いやはや、研究者の鑑です。さすがは教授です。脱帽いたしました。」

「いや、少し違うな。聞き込みなどしておらんよ。事実をいったまでじゃ。」

「えっ!？」

遠野の頭がまた少し混乱する。

「アルマスは普段、思念波といわれるもので会話するのじゃよ。まあ、一種のテレパシーじゃな。この場合会話とっていいかわからんが、双方向の意思の疎通が可能なのじゃよ。この思念波のメリツトは声に出さなくても心通じ合う点と、かなり遠隔地へも一方通行なら届くと言う点にある。一般的に言われているアルマスとは、君の言ったとおりの理解じゃが、実態は全く違っておるんじゃよ、遠野君。アルマスとは、真希少種であり、古代より脈々とその血を現在にも受け継いでいる實在の種族なんじゃよ。」

遠野の頭は完全に混乱し、言葉すら失っていた。教授はそんな遠野をよそに話を続けた。

「彼らは、われわれマジョリティー（多数派）の伝承・伝説の中にも登場してある。例えば、エルフ。あれは、アルマスじゃ。われわれとは違った独自の文化圏を持ち、魔法と呼ばれる技術をあやつる種族。エルフの特徴は確か尖がった耳じゃったよな。身体的なわれ

われとの違いがよく表されておるのう。」

遠野の顔がぴくぴくと引きつっている。暗闇でなかったら、神童の神童らしからぬ顔がさらけ出されてしまっていただろう。

遠野は声を抑えつつも少しうわづった声できいた。

「教授、私をおからかいですか……。それを信じると……。テレパシーで会話をし、伝説のエルフで、しかもあやしい魔法を操る種族が実在している、ですって！教授！ふざけないでください！この緊急時に何を戯れられているんですか！冗談もほどほどになさってください！」

遠野は端正な顔に血をのぼらせながら、最後は怒鳴るように教授に言った。

「ああ、既存の固定概念が抜けないんだね。あれって頭の良い子ほど、なかなかはずせないから。うん、うん、わかるよ遠野くん。」

やさしく、妙に一人で納得するような哀れみの口調で高峰教授はこたえた。

「なに哀れんでんですか！そんな話、真に受けられんと言っとるんです！」

さつきよりもさらに大きな声で遠野がほえた。

「そう大きな声を出すな。酸素が減るじやろう。」

落ち着き払った教授の声に遠野はハツとしてわれにかえた。

「す、すみません。取り乱してしましまして……。でも教授があのことを言うから……。ですよ。」

あいかわらず、真つ暗闇が辺りを包んでいる。

「時に遠野君。崩落があつてから何時間くらい経っているかね。」

「そうですね、かれこれ三時間は経過しているとおもわれますね。」

「うむ。わしの腹時計でも同じくらいじゃな。……。そろそろかの。」

教授はなにやら意味深げにつぶやいた。

「何がですか。」

「実は、アルマス有能力についてじゃが……」

教授が言いかけたとき、すぐさま遠野がかみついた。

「まだ言いますか!」

「まあ聞くんじゃ。アルマスの能力は思念波だけではない。彼らは右脳の解放により様々な物質とのつながりを実現させる力を持つておるんじゃ。言い換えれば一種のテレキネシスじゃな。彼らにとつて、物質は友であり、対立軸ではなく自分の一部のようなものなんじゃ。物質の形を変えたり、移動させたりする事はアルマスにとつ

て造作もないことじゃ。」

遠野は、なかばあきれぎみに教授の話を聞き流しながらいった。

「もう、お好きなように言っと思ってください・・・。」

高峰教授はつづけた。

「大気をいだき、大地と話そう、流れる水に身を任せ、炎を纏おう。地水火風のことわりは、いにしえよりの我が一部なり。アルマスに伝わる古い伝承じゃ。」

教授が語り終えた。

と、その時だった。

突然、真っ暗だった洞窟に、崩落して塞がれている岩のあいだから一筋の光が差し込んできた。

そうかと思うと、静寂さはそのままに、どんどん光が差し込み始め、瞬く間に洞窟中が、光という光で満たされていった。

遠野は、いきなりあふれた光のまぶしさに最初視力を奪われていたが、やがて光の中心に、まだぼんやりとだが、たたずんでいる人影を見た。

少しずつ、少しずつ目が光に慣れて、だんだんとその人影の輪郭が現されてきた。

それは両手を大地に向かって優しく広げてたたずむ一人の女性の姿だった。

「・・・せ、聖母マリア?・・・。」

遠野の目にはそう映ったのであろうか、彼は思わずつぶやいていた。さらに、目が慣れて周りの情景までがかなりしつかりと認識できるようになった時、

遠野はすべての言葉を失ってしまった。

両手を広げ、やわらかな微笑みを備えて立つ女性のまわりに、風船のようにぶかぶかと浮かぶ洞窟を塞いでいた巨石の数々。それが、まるでわたあめを地面に置くように、ふうわりと音も立てずに大地に下りて行く。小鳥たちのさえぜりを妨げる音もなければ、大地を揺らすような振動もまったくない。すべてが自然と一体で、当たり前のことのように行われていた。

何かしら美しくも神々しいこの光景は、すべての言葉を奪い去るのに十分であった。

「・・・大気をいただき、大地と話そう、流れる水に身を任せ、炎を纏おう・・・。」

高峰教授は遠野にふたたびこう伝えた。

「き、き、教授……。」「呆然とした表情で遠野は教授を振り返った。

「アホ面をさらすのはやめなさい。遠野君。神童がだいなしじゃぞ。」

高峰教授はそういつて遠野を軽くからかうと、優しい微笑をたくわえ、洞窟の入り口に立っている女性の所へ進んでいった。教授は彼女の横に立つと振り返り、まだ呆然と見つめている遠野に向かって言った。

「遠野君。この娘がアルマスじゃ。」

2・NAME

遠野にとって、その光景はとても信じられるようなものではなく、また、到底受け入れられるものではなかった。幾度となく目をまばたかせ、今のこの状況の把握に努めることで彼の頭は精一杯だった。しかし、これは今現実として起こっている、事実である。

まだ、身動きひとつとれずに棒立ちになって、魂がなかば抜けかけているような遠野の様子を見て、高峰教授は、落ち着いた様子で声をかけた。

「おい、遠野君。こっちへ来なさい。彼女を紹介しよう。」

教授に呼ばれ、ようやく彼の魂は呼び戻された。遠野の意識が回復した。

「はっ、はい！只今、そちらへ・・・。」

そう言うと、遠野はあたふたとした様子で、ゴロゴロと転がる岩に足を取られながらよたよたと歩き出した。膝が完全に笑っている。それも爆笑状態である。

ようやく、教授たちのもとへたどり着いたその時、遠野の膝はとうとう限界に達し、彼は岩に足をひっかけて仰向けに転倒してしまった。それは、仰向けになった、ひしゃげた蛙のようでも滑稽な姿であった。

「何をやっとなるんじゃ、君は。しっかりせんか。」

遠野をのぞきこむように眺め下ろす二つの顔は、ニヤツと微笑んだ高峰教授と、恐らく最悪の出会いになってしまったであろう、彼が生まれて初めて出会った『アルマスの彼女』であった。

少しウェーブのかかった黒髪にはきれいなブラウンがのって輝いている。年の頃は二十歳前後。爽やかな夏の日を連想させる褐色の肌の色は、どの民族にも属さない美しさを誇っていた。そして、何よりも印象的なのは、光の当たり具合によって変化する虹色の瞳だった。

無限の慈愛を含んだその瞳は、やさしい微笑とともに遠野を見つめていた。

遠野は仰向けにずっとけたまま、ただ、ぼーっと彼女を見上げていた。

「遠野君、魂が半分出ておるよ。」

教授にそう言われて、遠野はようやく我に返った。

「さあ、いつまでそんな所で寝っころがっとなんじゃ。さっさと起き上がらんか。このままじゃいつまでたってもこの娘を紹介できないわ。わははははっ！」

教授は豪快に笑い飛ばすと遠野の手をとって立たせてやった。

「あらためて紹介しよう。この娘はアルマスじゃ。古代よりの血統を受け継ぐ真希少種アルマスの娘じゃ。」

遠野はゴクリと息を呑み込んだ。

「名前は……。」

そう言いかけて、教授は少し言葉を止め少し考えた後、遠野に言った。

「まあ、君に言っても本当の名前はどうせ発音できんから、日本人風に『楓^{カエデ}』と呼んでやってくれ。」

ようやく普段の落ち着きを取り戻した遠野は、ちらりと彼女の方へ目をやり、教授に向き直って言った。

そこには、すでに神童遠野のいつものクールな姿があった。

「教授。まずは、無学でふがいなかった自分を心よりお詫びいたします。」

遠野は教授に向き直ると深々と頭を下げた。

「君、意外と立ち直り早いのう。」やや、あきれた様子で教授がつぶやく。

「恐れ入ります。で、教授。このアルマスの彼女のお名前なんですが、是非とも私に彼女の本当の名前を教えて頂けないでしょうか。」

遠野は自信に満ち溢れた眼差しで教授に懇願した。

「いや、だから発音できんて。」手と首を横に振りながら、教授は止めた。

「何をおっしゃいますやら。この遠野、幼少の頃よりあまたの言語学に通じ、現在では自由に操れる言葉もゆうに30を超えております。どうぞ、本当のお名前をお教えください。」

知識に裏付けられた絶対の自信。これこそが遠野が神童と言われる所以である。

「そうかあ・・・。」

教授はにわかに信じがたいという表情をしながらも遠野の申し入れを受け入れ、

そして、言った。

「彼女の本当の名前はの、『#,\$,)(,&#&96%（,’!』じゃ。」

遠野の顔から表情が落っこちた。

「は?。」

「いや、だから、『#,\$')&#&96%%(,'!』じゃ。」

「いま一度。」

「『#,\$')&#&96%%(,'!』じゃ。」

「さらに、いま一度。」

「『#,\$')&#&96%%(,'!』。」

遠野はゆったりと彼女の方に視線をやると、もう一度教授にもどしそして、何事もなかったように言った。

「で、こちらの『楓』（かえで）さんの件ですが。」

「幼少の頃よりの言語学はどうした。」 教授が聞き返した。

「遠い昔の想い出です。」 遠野がクールにこたえる。

「30を超える言葉を操れるとか。」

「そんなこともありましたね。」 遠い目で遠くを見つめる遠野。

「まったく。変わり身の早いやつじゃ。」

教授はため息をつきながら楓の方を向き、互いに微笑みあった。

「『楓』という名前を彼女はとっても気に入っている。アルマスの言語で唯一我々が正確に発音できる言葉、それが『カエデ』なんじや。これはアルマスの言葉で『大気』を表しておってな。われわれを優しく包み込むような大気は、まさしくこの娘にうってつけの名前じゃと我輩はおもっている。」

教授はそう言ってだまって楓に意見を促した。

「『楓』大好きです。」

透き通るようなやわらかい声で楓が答えると、森の木々や花々がいつせいに歌いだしたような気がした。

「さあさあ、こんな所で立ち話もなんじや。温泉へ行こう！温泉へ！地上の極楽は温泉にあり、というのが我輩の持論じや。今回も遠野君の歓迎イベントにかこつけて信州の秘湯の宿を確保しておるから。楓も来てくれて、極楽度200%アップじゃ！さあ、遠野君、楓、行くぞ！もたもたしているとチェックイン時刻に間に合わんぞ！」

そう言うとき、高峰教授はパワフルに山道を歩き出していった。

遠野の頭には、教授に聞きたいことが山のようにあったが、教授の背中を追いかけて一緒に歩いている

楓の姿は、無意識に彼を惹きつけていた。

「あ、あの、楓さん。先ほどは本当にありがとうございました。」

遠野は緊張しつつも、楓に心からの礼をのべた。頬がかすかに赤らんでいた。

「はい。」楓はにっこりとして短く答えた。

「申し遅れましたが私、遠野 漣^{みお}と申します。高峰教授の研究室で師事させて頂く事となりました。なにぶん、まだまだ浅識な駆け出し者ではありますが、今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。」

（な、なんて硬いガツガチのあいさつをしてるんだ！もっと気の聞いた挨拶をせんか漣〜！）

遠野の心の叫びとはうらはらに、遠野らしいといえbaumもっとも遠野らしい挨拶だった。

「はい。」楓はまたにっこりと短く答えると、今度はクスツと笑った。

「ミオ。ミオ。ミーオ！『（・・・&（）』！いきなり楓が連呼した。

最後はまったく聞き取れなかったが、突然自分の下の名前を連呼された遠野は、恥ずかしさのあまり思わず赤面してしまった。

「は、はい。ミオです。楓さん。」

「ミオ、私たちの言葉に似てるものがあります。」楓は楽しそうに言った。

「ミオ、『黒い子猫ちゃん』！かわいい！」

そう言うと楓は天真爛漫に笑った。

どうやら、ミオという名前の響きは楓にとってのストライクだったようである。

「は、はあ・・・。」

遠野は気の抜けた返事しか返せなかったが、天真爛漫に笑っている楓の姿を見ると、いつしか不思議と自分にも自然に笑みが溢れてくるのだった。

「十三、呼んでます。急ぎます。」楓が言った。

教授の声は遠野には聞こえていない。

しばらくすると、はるか先を歩いていた教授が大声で叫んだ。

「おーい！やつとこさ、駐車場に着いたぞー！さあ、温泉じゃー、二人ともハリアップじゃー！」

（なんで、最後だけ英語なんだ！？）

遠野はつまらない疑問を頭の中でめぐらせながらも、教授のもとへと急いだ。

ようやく駐車場に着いた三人は、止めてあった教授の愛車に乗り込み、高峰教授が待望する「秘湯の宿」へと向かうのだった。

3・温泉秘話？

1966年型アルファロメオジュリアスプリントGT。

これが高峰教授の愛車である。

美しいという形容が陳腐におもえるほどの、艶やかなボディライン、いかにも美味そうな完熟トマトを連想させる鮮やかなイタリアンレッド、そして、一たびその心臓に火が入られると歌いだすエンジンのカンツォーネ。そのすべてにおいてドライバーとそれを見るものを魅了する、世界的な芸術の一品。それが、まさにこのアルファジュリアである。

そして、この名車中の名車であるアルファジュリアにとって、もっともふさわしくない場所のひとつこそが、ここ「秘湯の宿 たごさく」専用駐車場だった。

人家を遠く離れた信州の奥地。の、そのまた奥の、すれちがう車が一台もない、か細い一本道をえんえんと走ったつきあたりの山頂付近に「秘湯の宿 たごさく」はひっそりと建っていた。

外観は完全にくたびれていて、茅葺の屋根が斜めにかしいでいる。玄関のまわりの壁にはズラリと年代物の金属製の看板が貼られ、なぜか由美かおるばかりの様々な看板が笑顔で来客を歓迎している。玄関横の「専用駐車場」と手書きで書かれた立て看板が申し訳なさそうに立っている所には、止まっている車は一台もなく、燃えるようなイタリアンレッドの教授の車だけが、膝ほどまでにおい茂った草の中、これでもかというぐらいアンバランスなコントラストを主張するかのように置かれていた。

「やれやれ、やっと着いたのう。ギリギリ間に合ったわい。なにせ時間にうるさい女将がおる宿なもののう、ひやひやもんじゃったわ。ところで、遠野君、車酔い大丈夫かね。」

トランクの荷物を降ろしながら教授は、青い顔をして這い出してきた遠野に聞いた。

「だ、大丈夫です・・・。」

楓が少し心配そうな顔で、足元がふらついている遠野を支えた。

「だ、大丈夫ですから。ありがとうございます、楓さん。でも、もう本当に大丈夫ですから。」

ひきつった笑顔をつくりながら、遠野は精一杯強がってみせた。

「さあ、まいりましょう！」

ふらつく足取りで遠野は先頭をきって玄関へむかった。

「秘湯の宿 たごさく」の玄関扉は昔ながらの大きなガラスがはめ込まれてある木製の扉で、ガラスには『たごさく』と金色の文字で書かれてあった。かなり古い木でできているようだが、厚みは普通の木製扉の三倍以上あるようで、くたびれはてた外観にはあまり似つかわしくない扉だった。

三人が玄関の前に立ち、遠野が扉を開けようと手を伸ばした瞬間、分厚い玄関扉が「スーッ」と両方向へ自動的に開いていった。

（自、自動ドア！？）

一瞬あつけにとられた遠野を尻目に、教授と楓はあたりまえのように中へ入って行った。

三人が玄関から一步踏み込んだその先には、くたびれはてた外観とはまったく違った世界が広がっていた。

そこには、なんと品の良いお香のかおりが漂い、美しい桃山様式にまとめあげられ、豪華絢爛にしつらえられたロビーが一行をむかえていた。世界屈指の一流ホテルや老舗旅館が贅の限りを尽くして造ったとしてもこれほどのロビーはできないのではないかと思わせるほど、そのロビーは気品に満ち溢れていた。

「いらっしやいませ！高峰様。お待ちしております。」

上等の西陣を身にまとった十人程の若い女中らしき女性達が、礼儀正しく一列に並び、正座で深々と三人に丁寧なお辞儀をした。

「お世話になるの。」教授はにっこりと笑って手荷物をあずけた。

「長旅、本当にお疲れでございましょう。ただいま、お飲み物をご用意いたしますので、どうぞ、次の間にておくつろぎください。後に女将もごあいさつに伺いますので。」

リーダーらしき女中の案内で三人はふかふかの絨毯の上を通って、次の間へと案内された。

案内された次の間は、明るい中庭に面した部屋で、窓からは銀閣をほうつさせる見事な月見台や悠然と錦鯉の泳ぐ池が見えた。窓越しに見えるその風景はまるで絵葉書のようなだった。

楓は錦鯉が気に入ったらしく、窓ガラスにへばりついてニコニコしながらじつと池をながめている。

遠野は、先程から部屋中をながめまわしては、一人でしきりに感心と感動を繰り返していた。

「あの違い棚の黒茶碗は、正真正銘の光悦です。その向こうの大皿は全盛期の柿右衛門の逸品で、現存するものはオランダアムステルダム美術館にある一品のみ。驚くべきは探幽の真筆の掛け軸と山楽の襖絵。そして、欄間の彫り物にいたっては快慶と左甚五郎に間違いありません！ここはまるで、美術館だ。いや、へたな美術館なんか裸足で逃げ出す品揃えです！教授、ここは一体なんなんですか！？」

遠野は興奮ぎみに教授に聞いた。

「ん？『秘湯の宿 たごさく』じゃよ。我輩のちょっとした知り合

いが経営しとる。」

教授は、さして驚く様子もなく答えた。

「いや、そういうことではなくてですね・・・。」

遠野が続けようとした時、扉の向こうで先程の女中の声がした。

「失礼致します。お飲み物をお持ちいたしました。それと、女将がご挨拶に参りました。」

分厚い座布団にどっかりと座ったまま、教授は扉に向かって返事をした。

「どうぞ。」

教授が声をかけると、ゆっくりと扉がひらいた。

先程の女中が正座をし深々と頭を下げ、横には漆塗りの盆にのせられた綺麗な薩摩切子のグラスと飲み物が入ったガレの水差しが置かれていた。

女中の後ろには、二人の女性の姿があった。

一人は40才前後だろうか、凜とした顔立ちで、髪を上^{かんざし}に束ねている。きつと名のある作者の作であろう朱色の櫛^{くし}と、銀の簪^{かんざし}が彼女の

威厳をひきたてていた。着物も落ち着いた色彩の西陣の特上物で、女中のものとは明らかに違って見えた。

もう一人はまだ十代前半に見える童顔の女の子で、長い碧の黒髪が額でまっすぐに揃えられていた。まるで日本人形のような容姿をしていたが、好奇心を秘めたいたずらっ子の様なきらきらした光がその瞳に宿っていた。彼女もまた、特上の赤い着物をまとっていた。

二人は次の間へ入ってくると阿吽の呼吸で正座になり、遠野にむかって三っ指をついて丁寧にお辞儀をした。

「本日は『たごさく』へようこそお越しくございました。わたくし、当館の女将を務めさせて頂いております、十と申します。遠野様に置かれましては初めての来館、なにかとお心細い点もございましょうが、お気づきの事などなんなりとお申し付けくださり、気持ち良く当館でのご滞在を楽しんでいただければ幸いです。」

十と名乗った40才前後の女将のあいさつは、その顔立ちと同じく凜としていた。

続いてもう一人の女の子があいさつした。

「二葉ふたばいいいます。よろしゅうおねがしいたします。」

女の子の言葉には少し京訛りがあった。童顔とあいまって、それがかえって愛くるしかった。

言い終わると、二人はもう一度遠野に向かって深々とお辞儀をした。

「こ、こちらこそよろしくお願いいたします。」

自分だけに向けられたとても丁寧なあいさつに、少し戸惑いながらながらも、遠野は答えた。

（もお、ええか？）・・・二葉

（まだです。後二秒。頭をさげてください。当館のしきたりですから。）・・・十

（もおええやか！もお、経ったて！）・・・二葉

（しかたないですね、まあ、いいでしょう。）・・・十

突然いきおい良く、二葉は顔を上げたかとおもつと、

「楓ちゃん！久しぶりやー！」と大声で叫びながら満面の笑みで、楓に飛びついていった。

楓もうれしそうに二葉を抱きしめた。

「今日来るってきいたし、ずっと待ってたんやでー。せやけどぜん

ぜんこーへんし、おかしいなあっておもてたら、裏口から来たって！うち、正面玄関で朝からずーっと待ってたんやでー。」

二葉は、よほど楓に聞いてほしかったらしく、一息にしゃべった。

そして、今度は思い出したように振り返ると、楓に向けていた愛くるしい眼差しとは正反対のするどい眼光で教授を探した。

教授はいつのまにか部屋の扉のところへ移動していて、こっそり出ようとしているところだった。

「待ち・・・！あんたのせいや。あんた、なに裏口からいつてきてんねん。」

二葉の低い声が教授の動きを捕獲した。教授は一瞬ピクツとしたが、そのままかたまっていた。

「いつつもいつつも裏口からはいつてきて！あんたの人生全部裏か！楓ちゃんが一緒のときはちゃんと正面から連れて来たりーな！楓ちゃん、かわいそうやんか！ほんまに！何考えてんねんな、十三！」

二葉は烈火のごとく教授を叱り飛ばした。

「わ、我輩は騒がしいのは苦手なんじゃ。正面の雑踏は合わんのじや。姉ちゃん知つとるじゃろう。」

教授は蚊のなくような声で言った。

（ね、姉ちゃん？・・・？）

「そんなん、あんたの勝手やろ！楓ちゃんが、可愛いそうやて言うてんねや！我輩はどーでもええんや、我輩は！あんたのせいで、うちかて朝から待ちぼうけや！一番に楓ちゃん迎えてあげられへんかったやんか！」

畳み掛けるような二葉の口撃が続いた。

「私、裏口好きです。」

楓は優しい笑顔でそう言つと、ふんわりと二葉を後ろから両手でつつんだ。

「あゝ、楓ちゃんはやさしいなゝ！ほんま、優しい子やわゝ！」

二葉は楓に振り向くとまた、愛くるしく楓に抱きついていった。

嵐のようなやりとりに遠野の頭は全くついていけなかった。

「もう、いいですか。お姉様。これ以上遠野さんを混乱させるわけにはまいりませんので、みなさんをお部屋へご案内いたします。後ほどゆつくりと十三は、かわいがってください。」

毅然とした声で十が言った。

（お、お姉様??・・・十三・・・??）

「さあ、遠野さん、お部屋へご案内いたします。美弥が案内いたしますのでついて行ってください。」

十はそう言つと扉のむこうに控えていた先程の女中にむかつてうなずいた。

「は、はい。」

気の抜けた返事をし、まるで狐につままれたような感覚を覚えながら、遠野は美弥に従つて長いふかふかの絨毯の敷き詰められた廊下を歩いていった。

4・温泉秘話？

遠野が案内された部屋は、山腹の少し開けた平地に設けられた『月光』^{ひかり}と呼ばれる離れの点在する特別エリアの中にある「桐壺」^{きりつぼ}という離れだった。和と洋が不思議と融合し、周りの自然ともうまく調和のとれた見事な建物で、玄関の框の片隅にフランク・ロイド・ライトのサインが小さく刻まれていた。

次の間での嵐のような出来事があってから、ここへ案内されるまでの移動だけで10分の時間を要していた。途中、案内係の美弥は遠野をいろいろと気づかせてくれて「いろいろと、驚かれることもおありでしょうが、大丈夫ですよ。十様をはじめ、皆とてもお優しい方達なので、きつと後でちゃんとご説明がありますからね。」とやさしく声をかけてくれた。そして、『秘湯の宿 たごさく』の全貌についても色々と説明をしてくれた。それは、移動時間をゲストに全く感じさせない超一流のもてなしだった。

『秘湯の宿 たごさく』は美弥の説明によると、敷地面積はおよそ350haで、これは東京ディズニーリゾート三つ分ぐらいに相当するらしい。一山全体が「たごさく」で、正面玄関は山すそにあり、小型ジェットが発着可能な滑走路、ヘリポートも完備されている。正面玄関はかなりモダンな造りらしく、何でも建築の鬼才と呼ばれたアントニオ・ガウディが存命のときにデザインしたものらしい。正面玄関から続くかなたな丘斜を利用した「日輪」^{ひのわ}と呼ばれるエリアの宿泊棟には最新設備が整い、客室数は300を数える。また、山の内部には巨大なドームが造られており、水泳からサッカーまでさまざまなスポーツを全天候で楽しむことができる。まさに、要塞である。山の中腹のエリアは「架橋」^{かけはし}と呼ばれ、段々畑状に部屋が並んでいる。このエリアの部屋は十の見込んだ世界の若手建築家が

一部屋一部屋を担当しデザインしたらしい。そして、山上付近の少し開けた平地にある、別名サンクチュアリ（聖域）と呼ばれる特別エリアがここ「月光^{つきひかり}」ということである。ちなみに裏口と呼ばれていた場所は「たごさく」の最も高い場所にあつて、今は使われていないが、「たごさく」創生の場所として、とても大切にされているらしい。

「たごさく」が現在の発展を遂げたのはひとえに、十の手腕による所が大きく、一度来た客は必ずリピーターになり、今や全世界に「たごさく」マニアが存在しているという。十の戦略により「鎖宿」とよばれる完全秘密主義を守っており、世間一般には「たごさく」の存在はほとんど知られておらず、けっして旅行雑誌やガイドブックにも載らないが、フランスのミシュランから特例のセブンスター17つ星を送られている。「たごさく」は今や知る人のみが知っている世界の頂点に君臨する「幻の宿」なのである。

遠野はいぐさの良い香りのする畳の上に大の字になって、ぼんやりと天井を見つめていた。

遠野の通された「桐壺^{きりつぼ}」はメインの18畳の和室とそれに続く12畳ほどのベッドルーム、そして8畳の広さのパウダールームからなっていた。風呂は十人はゆったり入れる程の立派な檜の内風呂で、その奥にはこれまた、十五、六人は入れる広さの、豊かな自然を抱いた風流な露天風呂があつた。満々とたたえられたお湯は「いつでもどうぞお入りください」といった様子で入浴者を待っていた。

遠野は何も考えられずにいた。

考えようとしても、その瞬間から思考が止まり、まったく訳がわからなくなってしまう。

遠野はいつしか考えることをあきらめ、

ただただ、ぼんやりと部屋の天井を見つめていた。

コン！コン！コン！コン！

しばらくして、玄関の扉が4回叩かれたかとおもうと、ガラガラと扉が開かれ、教授の大きな声が聞こえた。

「遠野君、入るぞ！」

「あつ、はい。」遠野は身を起こして和室の入り口に目をやった。

和室に入ってきた教授は、洒落た浴衣に大島紬の丹前を羽織っていた。

「なんじゃ、寝とったんか。」

「はい、すこし……。」

遠野は、心なしか元氣なく答えた。

「風呂にでも一緒に入るかの。この「桐壺」の露天風呂は格別じやから。」

教授はそう言うてにつこり笑うと、遠野を風呂へと誘った。

内風呂を通って外へ出ると、辺りは薄暗くなっていた。

夜にさしかかった風が少し肌寒い。

教授は勝手知ったる者のようにザブザブと露天風呂に入っていた。遠野もその後が続いて、そろりそろりと湯船に足をすすめた。

広い露天のいい位置まで来ると、二人はどつぷりと湯に身を沈め、岩を枕に空を仰いで顔を並べた。

「ふーっ。生き返るわい。」

教授は気持ちよさそうにそう言うと、両手で湯をすくって、顔を一度、二度こすった。

遠野もそれにならって、顔を洗うと、最後に濡れた手で髪を後ろにかき上げた。

オールバックになった髪型は、端正な遠野の顔をよりいっそう凛々しく見せていた。

「この温泉の湯は『綿雪の湯』と言ってな、白くてふわふわした綿毛のような湯の花が、湯の中を無数に漂っておるんじゃよ。その姿はまるで湯の中に雪が降っているみたいなんじゃよ。ほれ、湯の中をよく見てごらん、遠野君。」

遠野は少し身をおこして、言われるままに、じっと湯の中を見つめてみた。

それは、とても幻想的な光景だった。

本当に湯の中には雪が降っていた。湯の中には、真っ白で見るからにふわふわの雪のような湯の花が無数に漂っていた。薄く照らし出したやわらかな月の光がそれらを照らし、また反射して、夜の銀世界を演出していた。それらは、まさにゆったりと宙に舞う綿雪のような不思議な光景だった。

「さて、何から話すとするかのお。」

教授は落ち着き払った声で遠野に言った。

「何からでも結構です。教授におまかせいたします。」

遠野の声もまた、とても落ち着いていた。

「うむ、落ち着いておるようじゃの。」

教授は少し安心したように、そう言って何度かうなずくと、ゆっくりと遠野の方に向き直った。

そして、話し始めた。

「まずは我輩の、そう高峰家について話すとするかのお。少し驚くかも知れんが、これから話すことはすべて真実じゃ。しゃれや冗談は言わなので、固定概念を捨てて、どうか心して聞いてほしい。」

いつもどこかユーモラスな教授の表情が、いつになく真剣で、その目はまっすぐに遠野を見つめていた。

「先程、次の間で会った二葉と十の二人は、まぎれもなく我輩の姉じゃ。」

「姉！？ですか。」遠野は真剣に聞きなおした。

「うむ。義理の姉とかではなく、正真正銘の血のつながった姉じゃ。二人とも我輩よりもはるかに年上じゃ。」

「とても、そうは見えませんでした。教授よりも少しお若く見えた十さんはともかく、二葉さんは完全に女の子ですよ。」

「確かに誰が見てもそう見えるの。じゃが、二葉姉ちゃんかずはは、れっきとした高峰家の十三人兄弟の次女なんじゃ。長女に一葉という、凶暴な二葉姉ちゃんと違って、とても物静かな姉がおるんじゃが、この二人は双子なんで、年齢的には我輩をふくめた兄弟達の中でも年上にあたるんじゃ。ちなみに我輩は十三番目の末っ子で一番若いと言うことじゃ。」

「・・・ですが、普通あの容姿はありえませんよ。」

遠野がそう言うと、教授は『普通』と言う言葉に敏感に反応して言った。

「『普通』と言う言葉は、あくまで今世界で大多数を占めるマジョリティ（多数派）の人間の基準にとつての事じゃ。我輩達高峰の人間や楓達アルマスの『普通』の基準は明らかに異なっておる。『一見は真ならず』じゃ。」

「と、言いますと。」遠野はぐつと身を乗り出した。

「二葉姉ちゃんの年齢は、1700歳をゆうに越えておる。西暦245年生まれじゃ。」

さすがの遠野もこれには驚きを隠せなかった。

一瞬言葉を失ったが、遠野は声をしぼりだすようにして聞いた。

「・・・ではあの容姿は・・・」

教授は続けた。

「マジョリテイにとっては、まさしく十代前半の女の子と映るじゃろうな。じゃが、我輩達にとってみれば、二葉姉ちゃんの少女の様な容姿は、1700歳という年齢に見合ったごく『普通』の成長なんじゃ。」

遠野は暫し神妙な顔つきで考えをめぐらせていた。

「年齢は1700歳をゆうに超え、少女のような容姿・・・。それが普通の成長・・・。」

いま、遠野の頭の中のスーパーコンピュータは驚くべき速さで事態の解析に努めていた。

「遠野君、ここで改めて君に告白せねばならん事がある。」

教授はそう言っただけで大きく一度夜空を仰ぐと、ふたたび遠野に向き直った。

遠野を見つめる教授の眼差しは、いつになく落ち着きを宿した力強さを持っていた。

「高峰の人間は、真希少種じゃ。」

「!!!!!!」

「楓達アルマスがそうであるように、我輩達もまた、古よりその血脈を受け継ぐ真希少種族の一つなんじゃ。我輩の研究室に入った君には真実を知る権利がある。いや、君は知らねばならん。そして、君ならばその真実を受け入れ乗り越えていくことができる。我輩はそう確信しておる。今回、君の歓迎会と称して君を旅行に誘ったのは、この『たごさく』で真希少種が存在と本当の姿を知ってもらったためじゃったのじゃ。まあ、楓に来てもらう羽目になったのは予定外じゃったがの。」

教授はそう言うと、穏やかな笑みを浮かべて遠野を見つめた。

「……真希少種。」

教授の告白に遠野は最初言葉を失いかけた後、つぶやくように言った。

そして、まだ考えがまとまらない内に教授に聞いた。

「真希少種の実在は理解できました。また、その特殊能力についても実際に楓さんを通じてこの身をもつて体験しましたので、理解できます。しかし、1700歳の少女というのはいくらなんでも・・・。一体これはどのように理解したらいいのでしょうか。」

遠野の目は真剣に答えを懇願していた。

「うむ、君の疑問はもつともじゃ。じゃが、その質問に答えるには、高峰という真希少種族の特徴と真希少種の歴史、いや、『普通の人間』であるマジョリティの真実の歴史について説明せねばならん。かなり長い話になってしまうがそれでも良いかのう。」

「もちろん！望むところです！」

間髪いれずに遠野は即答した。

そこには目をキラキラ輝かせ、探究心に火がついて喜々としている遠野の表情があった。

5・温泉秘話？

少しのぼせ気味になっていた二人は、露天風呂の縁の岩に座りなおした。

ひんやりとしてきた夜風が、火照った体にあたって気持ちいい。

教授は話を続けた。

「まず、我輩達、高峰の種族の特徴じゃが、一番の特徴はその寿命の長さにある。これは現存する真希少種のような種族の中で、最長と言っても過言ではない。これは高峰を代表する二葉姉ちゃんの容姿と実年齢を考えれば、おのずと推測できるじゃろう。実際、天寿を全うした年齢が、1万5000歳を超えていた例もある。一葉姉ちゃんと二葉姉ちゃんは、西暦245年に双子として生まれた。そして、最初の十年とちよつとで今の容姿まで成長し、そこから長い『第一の成長の固定期間』に入っただのじゃ。恐らくこの固定期間はあと4〜600年は続くじゃろう。」

遠野は静かに話しに聞き入っていたが、軽く首をかしげて聞いた。

「最初の十年ちよつとで今の容姿まで成長したんですね。そして、成長が止まった。なぜ最初のその期間だけが特別なんでしょうか。」

教授は大きくうなずくと、すぐに答えた。

「良い質問じゃ。我輩は、これは生命維持の活動に関わるからじゃと考えておる。最初の十年で一定の個体の大きさにまで成長する事は、自立して生命を維持していくという活動において、まっこと理

になつておる。何十年も赤ん坊のままでは、自立した生命維持の活動など行えんからのう。」

「なるほど。確かに理にかなつていますね。では、第一の成長の固定期間というのは。」

教授はさらに話を続けた。

「うむ。高峰の種族には、生涯にわたる成長の過程で、通常三回の長い『成長の固定期間』がある。第一の固定期間が始まる時期は生まれてからおよそ10年から15年後。そして固定期間が始まり、その十代前半ほどの容姿のままでおよそ2000年から2500年の時を過ごす事となる。ちょうど二葉姉ちゃん達がこれに当てはまる。第二の固定期間は、二次成長と言われるものの後に訪れる。第一の固定期間が終わるとすぐに、十年ほどの期間で次の固定期間の容姿まで成長する。これを二次成長いう。二次成長後の容姿は大体二十代前半から半ば位じゃ。そしてまた、固定される。ただ、この二次成長後の第二の固定期間に関しては個体差がかなりあつての、3000年続くの者もおれば、6000年の者もある。そして、第三の固定期間じゃが、始まりはやはり三次成長の後始まるのじゃが、第二の成長の固定期間に個体差がかなりあるんで、それに準ずることになる。いずれにせよ、10年ほどで次の固定期間の容姿へと変わり、その容姿のまま最後の固定期間で過ごす事になるんじゃ。ちなみに、三次成長後の容姿は40代、60代、80代とまちまちじゃ。」

遠野はいたく感心した様子で教授の話に魅了されていた。

「すべてが、長寿の理屈に合っていますね。」

遠野は納得したように言った。

「うむ。我輩はこの驚くべき変化を『フリーザの三大変化』と呼んでおる。」

いつになく真剣な表情で教授は遠野を見据えて言った。しかし、その瞳の奥には遠野のなにかしらの反応を期待している、いたずらっぽい笑みが隠れていた。

「ほう！フリーザですか。はじめて耳にする名前ですね。それでフリーザとは一体何でしょう。」

興味深そうに、真面目な顔で遠野は教授の答えを待っていた。

「え！？」

一瞬、教授の目は点になっていた。

期待していたものとは全く違った反応だったようである。

「い、いや。ほら・・・ドラゴンボールの・・・。知らんのか・・・。」

教授は少しうつろたえた様子で、最後は消え入りそうな声で言った。

「ドラゴンボール??」

意図していなかった教授の答えに、今度は遠野がうろたえた。が、ハッとして何かに気づくと大きな声を上げた。

「教授!! 冗談は言わないって約束だったじゃないですか!!」

遠野の顔には血がのぼり、おもわず彼は立ち上がっていた。

「軽いジョークじゃったのに・・・。」遠野に怒られた教授はとても残念そうだった。

「まったく! なにがドラゴンボールですか! まじめにフリーザ考えちゃったじゃないですか!」

「すまん、すまん。まさか君がドラゴンボールを知らんとは思わなかったんじゃない。」

「そういう問題ではないですよ! 真面目に話をしてください、真面目に! まあ、確かにドラゴンボールは名前ぐらいしか知りませんけど。」

「わかった、わかった。我輩が悪かった。もう言わんから勘弁してくれ。」

そう言っただけで教授は遠野をなだめながら、座っていた岩から「ドブン」と湯船の中へ身を移していった。

遠野もまた、教授の後に続いて湯船に入り、話の続きは再び湯船の中へと移された。

夕暮れの面影を残していた空は、いつの間にか月がくつきりと浮かび、星の散りばめられた夜空へと移り変わっていた。

「で、お話の続きなんですが。ここまでの説明を聞いていて、一つ大きな疑問がありますので答えていただけますでしょうか。」

遠野はまじまじと教授を見つめながら切り出した。

「ふむ、大方の察しはついておるが、言うてみい。」

「教授と十さんについてです。十さんは名前からして十番目、教授が十三番目の末っ子、年齢的にはご兄弟の中では最も若い部類に入るはずですよ。でしたら先程の話からすると、教授たちの容姿も二葉さんと同じく十代前半の容姿をしていないとおかしいのではないのでしょうか。お会いした十さんは40代前後、教授も40代半ばから50代前半の容姿に見えます。これは一体なぜでしょうか。」

遠野の眼光が鋭さを増していた。

「母親が違っからじゃよ。」

教授は短く明瞭に答えた。

「母親が……。」

「そうじゃ。二葉姉ちゃん達と我輩達の母親は別なんじゃよ。父親

は同じなんで血はつながってるが母親は別なんじゃ。二葉姉ちゃん達を産んだ母親は高峰の純血種で、我輩達の母親はマジヨリティじゃ。二葉姉ちゃん達は生粋の純血種、十姉ちゃんと我輩は高峰の種族とマジヨリティの混血種にあたる。」

「純血種と混血種・・・ですか。」

「うむ。成長の固定期間が現れるのは純血種のみなんじゃ。我輩達にはそれがない。我輩達、混血種は最初の十年ちよつとは純血種と同じく成長するが、そこからはマジヨリティと同じようにゆつくりと歳をとって行くんじゃ。ただ、歳をとるスピード、というか時間の流れがマジヨリティとは全く異なっておつてな、そういう点では純血種とあまり変わりはない。つまり、混血種は、純血種には遠く及ばないが通常のマジヨリティと比べると、はるかに長寿であり、ゆるやかに年老いていくということじゃ。」

「なるほど、そういう事なら理解できます。ですが、十さんの方が早く生まれていて年上なのに、教授よりも若い容姿をされているのは、なぜでしょうか。」

「それはの、十姉ちゃんが女じゃからじゃ。混血種の女性は男性よりも成長のスピードが遅いんじゃ。そして、男よりもさらに緩やかに年老いていく。我輩はこれを種の保存に直接関わる女性ならではの特徴だと考えておる。若い適齢期が長ければ長いほど子孫を残す可能性が広がるからのう。」

教授はそう言い終わると湯船から立ち上がり、両手を腰に当てて夜空を見上げた。先程よりも明るさの増した月の周りには、星々が静かにさんざめいていた。

ほんの少しの沈黙の後、遠野が口を開いた。

「ちなみに教授はおいくつなんでしょうか」

「我輩か。そうじゃの……。君のひいじいさんが学生じゃった頃、我輩も学生じゃった。くらいで想像してみてはくれんかのう。」

教授はそう言つて遠野を見てニヤリと笑った。

「なんだか、とんでもない想像になりそうですよ。」

遠野は少しあきれ気味に教授に答えた。

「わははは！想像せんでええ、想像せんで！ちよつとばかり長生きしておるといふことじゃ。そんな事よりも今、我輩が話してきた話を君が理解しようとしてくれとる所に意味があるんじゃ。」

教授は豪快に笑いながらも、遠野に言い聞かせた。

そして、あらためて遠野に向き直ると、今度は真面目な顔に戻つて言つた。

「ええか、遠野君。ここまでは、真希少種である高峰一族についてほんの少しの説明をしたに過ぎん。ここからは、真希少種の存在そのものについて、真の歴史について話さねばならん。これから話す話は恐らく君の今まで培つてきた概念を根本から覆し破壊する事になるじゃろう。しかし、すべて真実じゃ。それは我輩達、真希少種族の存在が証明おる。ええか、落ち着いて聞くんじゃぞ。」

教授の真剣な眼差しに遠野の背筋はまっすぐに伸びた。

「はい！」気合の入った短い良い返事だった。

「実はの・・・」

教授が言いかけた、とその時だった。

露天風呂に通じる内風呂の扉がバーンと勢い良く開いたかとおもうと、突然赤いかたまりが飛び込んできた。

二人は、驚きのあまり一瞬あっけにとられたが、次の瞬間赤いかたまりが次の間で会った着物だという事を理解した。

同時に二葉の怒鳴り声が露天風呂中に響き渡った。

「あんたら、いつまで入ってんねんや！！！」

露天風呂の岩の上に仁王立ちになり、二人を見下ろす二葉の姿は真っ赤な怒りに燃えていた。

「い、いや、姉ちゃんもう出ようかと・・・。な、なあ遠野君。」

教授はうるたえながら、遠野を見て言った。

「えっ、あ、はい！」

遠野はあわててタオルで前を隠しながら湯船にうずくまるようにして真っ赤な顔で答えた。

「やかましーわー！あんたら、どんだけ待たしてんにやな！男同士でいつまでも、いつまでも、気色悪い！あんたら、頭とけてんのとちゃうかー！せっかく、その子の歓迎のお膳用意してあんのに、全然出てきーひんでー！みんな待ちぼうけやー！料理、さめてしもたらあんたのせいやでー！楓ちゃんも可哀そうに、ずーっと待ったはるわー！ほんま、えーかげんにしーやー！！」

二葉は烈火の如くはき捨てるように言った。

「す、すみませんでした！すぐ出ます！」

教授と遠野はすぐにシャキッと立ち上がると、まるで90度に曲がった定規のように二葉に頭を下げながら言った。

「ほんまに、もうー！しんぎくさいやつちゃんあー！ほんま早よしーやー！！」

二葉は語気を強めて恫喝するようにそう言い放った。

そして、再び怒りの赤いオーラを纏ったまま、ズンズンと扉へ向かって去っていった。

内風呂へ続く扉がバーンという大きな音を立てて閉まった。

「さて・・・遠野君、出ようかの。」

うつろな声で教授が言った。

「・・・そうですね・・・出ましょうか、教授。」

さらに、うつろな声で遠野が答えた。

高峰二葉、高峰家で最も恐れられる最恐の『少女』である。双子の姉一葉と共に「たごさく」では昔から「ダブル座敷わらし」と呼ばれ、見たものを幸せにすると宿泊客の間ではアイドル視されている。愛くるしい容姿からは想像できない威厳と（凶暴な？）性格を持ち、兄弟達の中でもその存在は際立っている。最近のあだ名は「業火（ゲヘナの炎）」「烈火の二葉」「赤い彗星」などなど。

教授と遠野の話の続きは、二葉の乱入により遠野の歓迎会の宴へと持ち越されたのであった。

6・歓迎の宴

遠野と高峰教授は8畳ほどのパウダールームで慌しく着替えに専念していた。

時折居間から聞こえる「まだかあ、ほんまにおっそいなあ!」という二葉の声がするたびに、二人は一瞬ピクツと身を反応させながら、いそいそと身支度を整えていた。

「で、できたか、遠野君。我輩はできたぞ。」

ややほだけ気味に浴衣を着た教授の姿には、相当慌てて着替えた様子が表れていた。髪はまだ半乾きでばさばさしていた。

「は、はい、私もできました。」

そう答えた遠野の髪もまた、半乾きでまだ雫が垂れていた。

「では、行くかのう。」

マッハで着替えを済ませたばさばさ頭の二人は、とるものもとりにあらず居間へと続く扉へと進んだ。

そしてゆっくりとそれを開けた。

パーン! パ、パーン! パーン!

二人が扉を開けた瞬間、勢い良くクラッカーが打ち鳴らされた。

「ようこそ！遠野君！そして、おかえり、十三！」

待つてましたと言わんがばかりに、そこにいたみんなが一斉に二人に声をかけた。

「おそいわ、ほんまに。」 二葉がニヤリとしながら言った。

「ようこそ！ミイオ！」 楓もニッコリ笑って遠野に声をかけた。

「いらっしやい。遠野君。」 品良くしとやかな声でそう言った女の子は、二葉と同じ顔をしていた。

「皆、お待ちしておりましたよ。あらためまして、ようこそ、遠野君。」 十が穏やかに言った。

「遅せーよ、二人とも。でも、やっとこれで、おれも飯にありつけるぞー！あ、遠野君だっけ、いらっしやい！それと、十三おかえりー！」

さばさばと、とってつけたような歓迎の言葉を言ったショートヘアの女性は、なぜか迷彩柄の軍パンに黒いタンクトップ姿だった。

遠野はあまりのサプライズな歓迎に当初完全に言葉をなくしていたが、

「あ、ありがとうございます！」と、

とまどいと緊張が入り混じった、ぎこちないあいさつをした。

教授と遠野は上座へと通され、みんなでぐるりと屋久杉でできた一枚物の丸いテーブルを囲んで腰をおろした。

教授の隣には楓が座り、その膝の上には二葉がちょこんと我が物顔で座っている。

その隣には、二葉と同じ顔をした女の子が、華麗な濃紺の着物を纏ってしとやかに座っていた。

（このひとが、きっと一葉さんだ。本当に瓜二つ、まさしく「ダブル座敷わらし」だ・・・！）

遠野は横目でその女の子と二葉と見比べながら心の中でつぶやいた。

遠野の横には、先程自分のことを「おれ」と呼んだ黒いタンクトップの女性が座り、並べられた料理に目をキラキラと輝かせていた。

そしてその向こうには、「たごさく」の女将、十が鎮座していた。

テーブルの上にはこれでもかと言うほどの豪華な山海の味覚が並べられていた。その盛り付けの美しさはもはや芸術と言っても過言ではなかった。本マグロ、あわび、米沢牛といった高級食材から珍味までが所狭しとひしめきあっている様は、まさに壮観だった。ただ、不思議なことに様々な木の実ばかりが集められた膳も用意されてい

た。

「姉ちゃん、もう食っていいか!？」

黒いタンクトップ姿の二十歳位の女性が、待ちきれない様子で二葉に聞いた。

「あほか!まだ、乾杯も終わってへんやろ!」

二葉はぴしゃりと言った。

「えゝ!おれもう腹ペコペコだよゝ!早く食わせてくれよゝ!」

その女性は泣きそうな声で懇願した。

「ダメですよ、五葉姉さん。何事にも順序というものがあります。順番はきちんと守らなくてはいけません。それに、この歓迎会は姉さんの為に開かれているのではないのですからね。」

十はその女性を五葉と呼び、冷静な言葉でたしなめた。

「ちえ!十はあいかわらずだなあ。でもおれ、マジ限界。早く乾杯しよーぜ!」

「ふーっ……。ほんまにあんたの食い意地だけはかわらへんなあ、五葉。」

二葉はひとつ大きいため息をつきながら、あきれた様子で言った。

「せやけど、誰かさんのおかげで十分待たされたんは確かや。うち

が遠野に一人づつ紹介するし、それが終わったら、もう乾杯にしよう！」

二葉は嫌味っぽくちらりと教授を見ながらそう言つと、遠野に向かって紹介をはじめた。

「うちと十はもうさつき会つたし、ええやんな。ほなまず、うちの隣に座つてる『かずちゃん』から紹介するな。本名は『高峰 一葉』かずは、高峰家の長女や。うちとは双子でうちのお姉ちゃんになる。顔がわいいとことか、うちとよー似てるやろお。よー見たつてえやー。」

二葉はにつこりと微笑みかけながら、遠野に視線をうながした。

「えっ、あ。は、はい。」

突然振られた遠野は、ちらりと一葉へ視線をやると、少し顔を赤くしてうつむいて答えた。

「『ふーちゃん』、遠野君困つてるじゃない。そんな紹介の仕方。遠野君、ごめんなさいね、こんな騒がしい人たちばかりで。私は高峰一葉といいます。これから十三をよろしくお願いしますね。」

なんとも言えない、穏やかな声と物腰だった。

遠野は頬を赤くしたまま、思わず返事をするのも忘れ、一葉に見とれてしまっていた。

「どーや。うちとそっくりやろ。」

二葉が自慢げに言った。

（ええ。確かにそっくりです、二葉さん。でも中身があなたと全然違います！中身が！）

心の中で遠野は叫んでいた。

「次は五葉ごえいや。」二葉はそう言つと遠野の隣に座っている女性に目をやった。

「その娘は五葉。高峰の五女になる。ちょっと老けてるけどれっきとしたうちの妹や。お母はんが二回目の出産で産んだ娘やし、うちより成長が早いんや。ここにはいーひんけど、あと上に三葉みつはと四葉よっぺていう姉がいててな、この三人は三つ子なんや。まあ、顔はうちらと違ちがごーで、みんなバラバラなんやけどな。五葉は、いつも従軍看護で世界中飛び回ってるし、そんなかつこしてんねん。さつきほんまに久しぶりに、いきなり帰ってきよってんや。」

「ういつす！おれ五葉。よろしくな、遠野！」 右手を軽く挙げて五葉が言った。

実にさばけた、とてもボーイッシュなあいさつだった。

「それで、最後は・・・」

二葉はそう言いかけると、くるりと楓に振り向いて

「楓ちゃんやゝー!!」と叫びながら楓に抱きついていった。

「え、楓さんはもう知ってますが。」遠野は頭に疑問符を浮かべながら言った。

「そんなことあらへん。ちゃんと紹介してもらてへんて楓ちゃん言うてるもん。大方、そのあほが恥ずかしがって名前ぐらいしか教えてへんにやる。」

二葉はそういうとジロリと十三を睨んだ。

教授はなにやら落ち着かない様子だった。

「この娘は、高峰 楓・・・そこに恐縮してる、十三の『奥さん』や。」

「え?!」

「ええゝ!!--!--!--!」

絶叫にも似たあまりの驚きの声であった。それは遠野自身、生まれてはじめてあげた驚愕の叫びだった。

「はい。楓、十三のお嫁さん！十三、これからよろしく、ミィオ！」

楓は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに言った。

よほど『奥さん』と紹介してもらった事が嬉しかったらしく、料理の飾りとして添えてある花のつぼみが一斉にふくらんで見事な花を咲かせた。

遠野はあつけにとられた様子で、何かを訴えかけるように教授に目をやった。

「ま、まあ、そういう事じゃ。別に隠しとった訳じゃないんじゃが・・。その、まあ、なんじゃ・・。

楓は我輩の、・・『家内』じゃ。」

教授は顔を真っ赤にしながら、目線を合わせられないぐらい照れて答えた。

また、一段とつぼみが花を咲かせた。

「さー！遠野のええ声聞かしてもうたし、乾杯しようか！」

二葉はグラスを持つと、ひときわ大きな声でみんなに呼びかけた。

7・長い夜

「乾杯〜！！」

二葉の音頭で勢い良く揚げられたグラスを合図に祝宴が始まった。

五葉は合図とともに怒涛のごとく美しく盛り付けられた料理の襲いかかり、大喜びで次から次へと平らげている。その横で、嬉々としている五葉とは対照的に、いまだあつけにとられて、信じられないといった表情の遠野がいた。

「なんや、なんや、遠野！えらい元気ないやんか。そないシヨックやったんか、楓ちゃんが十三の奥さんやていうの。」

小ぶりの飛騨牛の串焼きをほおばりながら、二葉がニヤニヤした顔で遠野に聞いた。

遠野はハッとして我に返った。

「そ、そんなんじゃないです！」

強く否定した遠野の顔は真っ赤になっていた。

「えらい声で驚いてたもんなあ。楓ちゃん、ほんまかわいいし。一目惚れやったあ？でも、残念やったなあ。楓ちゃんはな・・・うちの

もんなんやでー！あははははは！」

二葉は意地悪そうにそう言った後、遠野を見下ろして勝ち誇ったように笑った。

「それを正しく言い直しますと、姉さんのものでもないですよ。」

上品に鯛の切り身を口に運びながら、十が冷ややかに言った。

「ちっ！」

「そうよ、ふーちゃん。楓ちゃんは楓ちゃん。誰のものでもないわ。そーよね、楓ちゃん。」

一葉は優しく、さとするようにそう言つと、にっこりとした笑顔に向けて楓に聞いた。

「はい！楓、十三のお嫁さん！かんぱーい！ミィオ！」

そう笑顔で答えた楓の天真爛漫で大きな声は 場を一気に包み込んで和ませた。

遠野は不思議な気持ちになっていた。

天真爛漫な楓の声を聞くと自然と心が落ち着いてくる。

そして笑顔につられるように、自分の中にとっても楽しい気持ちが湧き起こってくるのである。

（教授の奥さんだった事には驚いたけど、楓さん・・・本当に不思議な人だ・・・）

いつしか、心の中で遠野は微笑みながらつぶやいていた。

「まあ飲め、遠野君。隠しとったわけじゃないが、ちょっと照れくさかったんじゃない。こう見えて我輩、なかなかシャイなもんで。これから、楓ともどもよろしく付き合ってくれと、嬉しいんじゃないの。」

教授は遠野のグラスにビールを注ぎながら落ち着きのある笑みを浮かべて言った。

「もちろんです！教授。こうなったら、とことん付き合わせていただきますからね！私の方こそ、よろしくお願いいたします！」

そう言った遠野の顔には、先程とは打って変わって生気が満ち溢れていた。

二人は顔を見合すと、お互いにくったくのない笑顔で笑い合った。

「あ、遠野そのあわび食っていいか。」 五葉は口いっぱい口ブスターを頬張りながら遠野に聞いた。

「はい。どうぞ、どうぞ。」

遠野は美味そうに煮込まれたあわびの乗った皿を五葉に渡しながら、改めてテーブルに並んでいる料理の豪勢さに感心していた。

（凄いな……。よくまあ、これだけの食材が揃うもんだ。）

そう思いながらテーブルを見回していた遠野は、ある不思議なことに気が付いた。

楓の前にある膳だけが、なぜか木の実ばかりが集められたものなのである。

世界中の様々な木の実が色とりどりの古伊万里とおもわれる小皿に少しずつ盛られて、楓の前に並んでいた。楓は二葉とにこやかに話しながら、時折その木の実を一つ掴んでは口に運んでいた。

「教授、楓さんの所だけなぜ膳が違うんですか。」

遠野は不思議そうな顔で教授に聞いた。

「うむ、楓達アルマスは木の実が主食なんじゃ。というか木の実しか食さんのじゃよ。太古の昔から人間は植物の恩恵に与ってきた。それは今も変わりません。人類最古の種族の一つであるアルマスが木の実しか食さん体質で、それだけで生命を十二分に維持できるという事実は、むしろ我々人間の本来あるべき姿なのかもしれん。」

教授は感慨深げに答えた。

「確かに……。それはある意味、最も自然と調和した形と言えますね。では、アルマスの方々は人体の構造も我々とは少し違っているのでしょうか。」

「そうじゃ。良い所に気がついたのう。楓達アルマスは太陽光と水そして少量の木の実から生命エネルギーを作り出す人体の構造をもっている。そして、それにふさわしい器官が発達しているんじゃ。じゃが人体構造が違っているのは、なにもアルマスの種族に限ってだけではない。世界に存在する真希少種族の中には、我々とは全く異なった構造を持つ種族も数多くあるんじゃよ。むしろ、我々とはほとんど同じ人体構造を持つ種族などほとんどおらんと言ってもいいぐらいじゃ。遠野君、君はこの真希少種族の人体構造の違いについてどう考えるかね。」

教授は遠野が投げかけた質問に、ビールの入ったグラスを傾けながら答えると、逆に遠野に聞き返した。

「進化の・・・過程による違いでしょうか。でも、そこまで人体構造が違うとなると、もはや『普通の人間』としての規定からはずれる

と思います。」

遠野が少し考えて、そう答えた時、二葉は飲んでいた切子のグラスを静かに置いて言った。

「遠野、あんたの言う『普通の人間』ってなんや。」

妙に落ち着いた声の質問に、遠野は少し戸惑いながらもすぐに答えた。

「えっ……。それは、私たち大多数を占める人類の事です。教授の言い方を借りればマジョリティという事になりますが。」

「人数が多いし、その基準こそが『普通』で『普通の人間』なんやと、そう思ってたねんやな。」

二葉は「普通」という言葉をやや強調しながらも穏やかな口調で聞きなおした。

「はい、そう思っています。」

遠野はきっぱりと答えた。

「うちらから見れば、あんたが『普通の人間』て言うてる大多数の人間は、『異常な人間』なんや。」

そう言った二葉の眼に冗談はなかった。

その言葉は1700年の歳月を生きてきた者だけが知る威厳にも似た重みを持っていた。

「どついつことでしょうか。」

遠野はたまらず二葉に聞き返した。

「ほんまの歴史については、まだ十三から聞かされてへんみたいやな。」

二葉はそう言つと、ちらりと教授に視線を向けた。

教授は二葉と視線を合わせて頷くと、再び遠野に眼をやって話しはじめた。

「風呂場のつづきになるが、人類の真の歴史について話すとするかの。なぜ二葉姉ちゃんがいま『普通』という言葉に敏感に反応したかもこれでわかる。君は先程、進化の過程という言葉を口にしたが、それでは、人類の進化の歴史について君はどう理解してある。」

「はい、一般的にはおよそ400万年前のアウストラロピテクス（南の猿人）に起源があり、その後の進化によるホモサピエンスの出

現によって、今現在の我々があると理解しております。」

遠野は毅然として答えた。

「うむ。すると君は人類の歴史というものは約400万年程度じゃと考えておるといふ事じゃな。」

「はい、最新の研究結果からも400～500万年あたりかと推測されます。」

教授はそう言い切った遠野の顔をしげしげと見つめ直して真剣な表情で言った。

「おかしいと思わんか。」

「は？・・・何がでしょうか？」

「速すぎるんじゃないよ。その進化のスピードが。地球という星が生まれてどれだけ経つておると思つとるんじゃない。その中においてたかだか400万年程度で、このような進化は速すぎるんじゃない。というか、絶対に起こらん。生命の進化というものの過程は、その星の歴史に比例するものじゃない。それこそ何億、何十億年もの歳月が必要になる。生命とは、それを生み出した星とともに緩やかに成長していくものじゃない。君は本気で人類の起源が400万年程じゃと信じておるのかね。もう一度固定概念をはずして冷静になって考えてみるんじゃない。君の頭なら何が正しくて、そうでないか、すぐに理解で

きるはずじゃ。」

遠野はしばし言葉を失った。

「速すぎる進化・・・」

遠野は一言そうつぶやきながら、教授の語った意味を改めて考えてみた。

遠野は幼少の頃より神童と呼ばれた程の男である。一を聞いて十を知るどころか二十も三十も知ってしまう彼の頭脳は、今超人的な速さで事態の解析を行っていた。

そして、彼の頭のスーパーコンピューターは、ハッと何かに気づかされたように一つの結論を導き出した。

「教授のおっしゃる通りだと思います。改めて考えてみると・・・なぜ今までこんな簡単な事実に気づかなかったのか。なぜ疑問すら抱かなかったのか。・・・本当に自分でも不思議です。今の人類の進化はあまりにも速すぎる・・・。こんな進化は、絶対に・・・ありえない！」

何かを悟ってしまったように答えた遠野に対して、教授は続けた。

「無理はない事なんじゃ、君ですら気づかなかったのは。生まれてからずっとそう教え込まれて来たんじゃから。そして、これは時間の経過の違いにも原因はある。我々真希少種族と比較してマジヨリテイの寿命はあまりにも短い。長生きしても100年程じゃ。これでは400万年と言われると何か気の遠くなるような長さだと、錯覚さえしてしまう。そこに落とし穴があったんじゃ。」

教授の言葉は、見事に真相を射抜いていた。

「では、真の歴史とは・・・。」

遠野は次の答えを懇願する真剣な眼差しで教授を見た。

「ここから先は落ち着いて聞いてほしい。」

いつになく真面目な様子で教授は前置きすると、どつかりと遠野に向かつてあぐらを組みなおして、話し始めた。

「真の歴史とは、二つある。一つは『真の人類の歴史』、そしてもう一つは『マジヨリテイの真の歴史』じゃ。『真の人類の歴史』とは、地球の誕生とともに育まれてきた生命の歴史であり、この星によつて産み出され長い長い年月を星の成長とともに歩み、様々な環境に適応して進化を続けてきた、地球の古来種であり真の人類である『真希少種の歴史』じゃ。そもそも『普通の人間』という言葉はこの星の歴史を考えれば真希少種を指すことになるんじゃ。先程、二葉姉ちゃんがマジヨリテイを『異常な人間』と言ったのはこの事からなんじゃ。真希少種の歴史はまさに地球の歴史そのものであり、その進化の過程も何十億年という星の成長に比例してきた。この『普通』の人類の生命の数は、当初より決して多くはなかったが、一

概に長寿であり、星を脅かすような爆発的な繁殖能力も持つておらんかった。自分たちが星から生まれたものであり、星の一部だという事を自覚して、尊重し合い、この星に存在する事象や生命といった様々なものとの調和はかり緩やかに進化の道を歩んできたんじゃ。夜という事象と調和して進化した種族もおれば、獣と呼ばれる人とは違った生命と調和して進化した種族もある。世界には決して表舞台にはめったに姿を見せないが、色々な真希少種族が今も存在しておるんじゃ。そして、この真希少種族こそが、この地球で正常に進化した『普通の人間』なのじゃ。一つ目の歴史、『真の人類の歴史』とは我々も含めた真希少種族の歴史のなのじゃよ、遠野君。」

教授はそう語り終えると、ビールが三分の一ほど残ったグラスに手を伸ばした。

楓は冷えたビール瓶をひいとり上げると、うれしそうに教授のグラスにビールを注いだ。グラスには決め細やかな白い泡が綺麗に立ち上がり、まるで麦の合唱を見ているようだった。

遠野は神妙な表情で教授の話に聞き入っていたが、教授に習って自分のグラスに手を伸ばしてそれを取ると、入っていたビールをぐいっと一息に飲み干した。

「なるほど……。すべての様相がわかってきました。」

そう答えた遠野の顔には、かつての神童の面影があった。

「おめえ、あつたまいいなあ。おれなんて半分くらいしかわかんなかったぞ。」

隣で五葉が、極太のゲソの唐揚げをはみながら、いたく感心した口調で遠野に言った。

「それは、五葉姉さんが食い気に走ってたからです。」

十が緑茶をすすりながら、冷静に言った。

「あ、やっぱそう？さすが十、よく見てるなあ。」

五葉はそう言って豪快に笑いながら、続いて笹団子をひとつ口にほうりこんだ。

遠野はそんな五葉を尻目に、あらためて教授の方へ向き直ると、今最も気になっている質問を教授に投げかけた。

「我々人類の、いえ『マジヨリティの真の歴史』とは、どのようなものなのでしょうか。」

遠野の質問に、一瞬居合わせたみんなの動きが止まったように思えた。

教授はビールでできた白い髭をたくわえながら静かにグラスをテーブルに置いて、遠野を見た。

その時、教授の横から二葉が口を開いた。

その目はしっかりと遠野を見据えていた。

「8000年や。」

「えっ。」 遠野は一瞬何を言われたのか理解できずに二葉を見つめた。

「8000年、今大多数を占めてる人類の歴史はたったの8000年なんや。」

二葉は威厳のある落ち着いた声で遠野に言った。

遠野の顔からすべての表情が失われた。

二葉の告白は、遠野の思考を奪い去るには十分の、あまりにも衝撃的な内容だった。

8・ヒストリア

遠野は呆然として言葉が出なかった。

自分たち人類の歴史がたったの8000年しかないなど、到底信じられない事だった。400万年と言う進化が短すぎるというのに、8000年での進化はもつとありえない。いや、むしろ先程の話を完全に逆行している。

遠野の頭は混乱していた。

「ど、どういふ事なのでしょう。」

遠野はやつとの思いで言葉をしばらくだした。

「君が混乱して驚くのも無理はない。じゃがすべては事実じゃ。正確に言えば現在のマジヨリテイの歴史が始まったのは今からちょうど8254年前なんじゃよ。」

教授は憂いを含んだ目で遠野を見て答えた。

「……8254年前……。遠野はつぶやくように復唱した。」

「そうじゃ。信じられんかも知れんが、8254年前に現在のマジヨリティは突然現れたんじゃ。そこには進化と言うものは存在せん。

最初から今の姿で集団で発生し、瞬く間に地に満ちていったんじや。」

「そんな……。信じられません！」

遠野は興奮気味に教授に答えた。

教授の示した回答は、遠野にとってあまりにも受け入れられないものだった。

遠野は苛立ちにも似た様子で視線をテーブルに叩きつけた。

しばしの沈黙がながれた。

「本当なのよ。」

二人のやり取りを静かに見守っていた一葉が、遠野をいたわる様に優しく話しかけた。

「ここからは、私がお話しますね。」

一葉がそう語ると、皆の視線がいつせいに一葉に注がれ、うつむいていた遠野も顔をあげた。

「8254年前の6月11日。すべてはここから始まったの。五つの大陸に同時にマジヨリテイの祖先にあたる集団が突然出現したの。彼らは皆初めから若者で、男女比は半々。一つの集団は1万から2万人程だったと言われているわ。この彼らの出現の異様さは、今でもすべての真希少種族が記憶しているわ。その後、彼らは猛烈な勢いで人口を増やしていき、あっという間に世界中に満ちていった。そして文明と呼ばれるものを次々と築き、戦争を繰り返しながら繁栄していったの。そして、現在に至っているの。」

一葉の落ち着いた口調は、遠野に少し冷静さを取り戻させた。

一葉は話を続けた。

「彼らがどこから来たのか、なぜいきなり現れたのかは今もわかっていないわ。ただ……。遠野さん、どうか驚かないで聞いてくださいね。」

一葉は少し間をおいて、念を押すようにそう言つと真っ直ぐに遠野の目を見た。

「彼らの出現はこれが初めてではないの。」

「え?・・・」

遠野の頭にまた新たな疑問が生まれた。

「私たちの歴史において、彼らの出現は過去に6回起こっているの。今回の出現は7回目にあたるわ。」

驚くと言われたが、あまりに衝撃的な内容で遠野は動揺を隠せなかった。遠野はそこに居合わせた一人一人に確認するように視線を送ったが、皆一律に沈黙を守ったまま、目で事実を伝えていた。

「どうということなのか、私にはさっぱり理解できません……。突然現れた人類、しかも過去にその出現が6回も起こっている。あまりにも突飛な話で……。一体どう受け止めていいのか……。」

正直な気持ちだった。

一葉が語った事は真実であろう。そう頭ではわかっていても、気持ちの部分でどうしてもこの事実を受け止めることができなかった。

「あなたが、受け止める必要はどこにもないわ。ただ、事実を知っておいてほしいの。それがこの星の願いでもあるから。」

一葉はやんわりとした口調で微笑を浮かべ、うなだれかけた遠野にそう言った。

「星の、願い……?」

遠野は顔を上げて一葉を見つめた。

「そう。この事実を知る事はこの星の願いなの。過去に6回出現した人類はすべてこの星によって淘汰されたわ。彼らはいずれも文明と言う名の進化を加速させ、この星とともに歩む他の生命を蹂躪し、星自体をも傷つけ我欲のままに破滅の道を歩み始めた。星はその度にまるで寝返りをうつかのように天変地異を起こしては、彼らを淘汰してきたの。でも、それはこの星の本当の意思ではないの。この星とともに生きる生命のすべてを守る為に、星は取らざるを得なかった選択を行ってきた。でも、本当の星の願いは、発生原因は不明でもこの星に生を得て、生きているすべての者と共存し、共に一つの道を歩んでいく事なの。星はマジョリティ自身が星の一部であると言うことを自覚する事を望んでいるわ。」

そう語った一葉の目には、なにか慈愛にも似た暖かさがあった。

「どんだけ探しても8000年以上前の古い遺物なんか出てきいひんやろ。そこが始まりなんやし。たまに学者ていわれてる連中が1万年前やとか1万2000年前の物が出てきたていうてるけど、それは自分らのもんとちゃう。ほとんどが真希少種族の痕跡なんや。あんたの頭やつたら十分解るはずや。」

二葉は一葉に続いてそう言うと、じつと遠野を見つめて話を続けた。その目は一葉同様にどこか暖かさを含んでいた。

「遠野、あんたが驚いてるってことはようわかる。せやけど、さつきかずちゃんと言ったみたいに全部受け止めて、抱え込む必要は全然ないんやで。うちらはただ、この事実を知っというてほしかっただ

けなんや。」

二葉は優しく遠野に声をかけた。

遠野は、二人の視線になんともいえない落ち着く感覚と優しさを感じていた。

（・・・二葉さん、本当は優しい人なんだな・・・）

先程までのとまどいと驚きをよそに、遠野は心の中でつぶやいていた。

ダブル座敷わらしは見たものを幸せにするというが、遠野の心は今不思議と穏やかな気持ちに包まれていた。

「取り乱してしまいましたが、もう大丈夫です。」

遠野は、気を取り直して笑顔で返事をした。

「まったく、相変わらず立ち直りの早い奴じゃ。」

教授はにやりと笑って遠野にそう言つと、ドンと遠野の胸をこづいた。

「ですが教授、今のお話ですが、人類の祖先が突然現れたと言うのは一体どういことなんでしょうか。そこだけがどうしても理解に苦しみます。」

「うむ。もつともじゃが、正直我輩達にも全くわからんのじゃ。いずれにしろ一葉姉ちゃんの説明のように、それは過去に6回も起こっておる。今回で7回目じゃ。大体一つのマジョリティの歴史は7000年から8000年で淘汰されとる。今回も時間の問題じゃろう。じゃが、淘汰は本当のこの星の意思ではないというのも事実じゃ。星は生命というものをとても慈しんでおる。突然あらわれたマジョリティもこの星に暮らす実体のある生命なんじゃ。星は本当は淘汰を望んではおらん。」

教授はそう言うと、ウズラの煮玉子をぽんと口に放り込みビールを流し込んだ。

「時間の問題ですか。また淘汰がやってくると。確かに近年の世界的な異常気象を考えると、この星が寝返りを打つ時期が近いのかもしれませんね。」

遠野は冷静に分析したかのように答え、そして続けた。

「その淘汰を回避する方法はあるのでしょうか。一葉さんは星の一部であることを自覚するとおっしゃいましたが、それは具体的にはどのようにすれば良いのでしょうか。」

「まあ、そうせつつくな。焦りは禁物じゃ、遠野君。君はかしこすぎて、先走り過ぎるところがあるのう。」

教授は遠野をなだめながら軽いため息をついた。

「しかし、時間の問題だと。」

遠野は負けじと答えを懇願した。

「安心し。まだ何の兆候もでてへんし。あと二、三十年は大丈夫や。」

「そうよ。なんの兆候も出てないわ。淘汰が始まる時には必ず兆候が現れるの。まだ心配ないわ。」

二葉と一葉がにっこりと笑って言った。

「ですが・・・。」

遠野が続けようとした時、教授は落ち着いた物言いですれをさえぎった。

「『ヒストリア』、歴史、英語のヒストリーのもとになっておるギリシャ語じゃ。その本来の意味は『探求』じゃ。淘汰を回避する方法を探ること、それはマジヨリティとは何かということを探し出すことなんじゃ。何者によって創られ、もたらされたのか、その目的は一体何なのか。我輩達、真希少種族は長い歳月の間、おのおのその答えを探し続けてきた。その答えこそが唯一淘汰を回避する道

じゃと信じておるからじゃ。答えは今だ見つかっておらん。じゃが、この星の真希少種族の膨大な歴史の中にきつと答えは隠されておる。中には非協力的な種族もあるが大部分の種族は協力的じゃ。それをつきとめる事が星の願いだと皆感じておるからの。」

教授はそう語ると甘栗をひとつ串に刺して取り上げると、その手を前につきだして言った。

「ヒストリアこそ我が最大の研究テーマじゃ！様々な真希少種族の持つ真の歴史を照らし合わせ、マジヨリティの謎を解き明かし星の願いを実現させる。これこそまさに男のマロン、いやロマンじゃ！」

決まった！・・・と思っていたのは十三のみだった。

いや、唯一楓だけが喜んでいる。満面の笑顔で十三かつこいいー！と声援をおくっている。

「あほか。なにがロマンや。」 二葉は呆れ顔でつぶやいた。

「マロンとロマンを履き違えるところが十三らしいですね。」

十が相変わらず冷静に緑茶をすすりながらいった。

五葉は遠野の横で笑い転げていた。どうやらマロンがヒットしたようである。

そんな五葉の隣で遠野は少し考えていたが、なにか思いついたようにいきなり真顔で切り出した。

「教授、地球外生命体が関与しているという線は、考えられないでしょうか。」

皆、一瞬言葉を失った。

妙な沈黙が遠野を包んだ。

そして次の瞬間、まず五葉が大爆笑した。

「あはははは！！お、お前。まじでおもしろ！宇宙人信じてんの？！あはははは！！お前、賢いけどバカだよなあ！あはははは！！」
五葉は笑いすぎでひきつりながらバシバシと遠野の肩を何度もたたきながら言った。

「な、なにを一体・・・」

遠野は顔を少し赤くし、うろたえながら答えた。

「はあ・・・。遠野、おるわけないやろ。」

二葉は深いため息をつきながらあきれ果てた声で言った。

「生命はこの星が育んできたていうたやんかあ。たとえ宇宙人がおったとしても、なんでこんなとこまで来てわざわざそんな事せなあかんねんやあ。それにや、宇宙人かてその星が育んでここまで来れ

るまで進化したんやろ、それやったらうち以上に生命の尊さは知ってるやろ。見学こそすれ、よそ様の星にに手え出すやてありえへんやんか。ほんまにもう……。はあ……。」「

遠野の顔が恥ずかしさのあまりさらに赤くなった。

「ま、宇宙人説は、ないですね。」 十がさらりと否定した。

「気持ちはわかるが、真の歴史上にも宇宙人は今だやって来てはおらんのだ。これはあくまでこの星だけの問題なんじゃよ。でも・・もし宇宙人がおるんならナメック星人には会ってみたいもんじゃのう。」

教授はそう言っていると、いたずらっぽくにやりと笑って遠野を見た。

「またドラゴンボールですか・・・。」

遠野は顔を赤くしたまま、うつむいてやや肩を震わせながら答えた。

9・茶色の小瓶

「あゝ笑った、笑った。ほんと、遠野っておもしろえよ。」

五葉は笑いすぎてこぼれた涙を手でぬぐいながら言った。

宇宙人説を完膚なきまでに否定された遠野は、まだ赤い顔をしたままうつむいていた。

「あ！宇宙人で思い出した！そういえばおれ用があって帰ってきたんだっ！！」

五葉は突然なにかを思い出したらしく、迷彩の軍パンのポケットをごそごそ探りながら話を続けた。

「宇宙人みたいなやつにあっただよ。って言っても本当の宇宙人じゃなくてさ、ほら、なんてったつけ、目の離れたやつで、こつやたらでこが広くて、魚みたいな顔の。あゝ名前が出てこねえ！みっちゃん（三葉）の追っかけをしてる、あいつだよあいつ！」

「サラン君か！」 教授はハツとして言った。

「そう！それだ！サランだ！さすが十三！思い出したぜ。おれそいつに会ったんだよ。」

「サラン言ったら、ドイツのヨハンとこの研究員やんか。あんた、どこで会ったんや。」

「ソマリアの難民キャンプだよ。なんでも十三に渡してほしい物を博士から預かって来たからって、わざわざおれ達のキャンプを訪ねて来たんだよ。直接たごさくに来ればいいのにさ。あいつぜってえ、みっちゃんに会いに来たんだぜ。おかげでみっちゃんとよっちゃん（四葉）を残して、おれがこれを届ける羽目になったんだよ。」

五葉はそう言うのと、軍パンのポケットから一つの茶色い小瓶を取り出した。

茶色の小瓶は蠟で封されており、なにやら複雑な紋章の印が押されていた。そして中には紙らしきものが入っていた。

五葉は取り出した小瓶をそつと遠野と教授の前に置いた。

「これはヨハン・フロンコンスティン博士からの手紙じゃよ。博士は我輩と同じくドイツでヒストリアの手がかりを探しておる人物じゃ。博士はやたらと用心深い男での、マジヨリティの通信網を一切信じておらんのじゃ。大事な用件は電話やメールなどは使わずに、必ず茶色の小瓶に手紙を入れて届けさせるんじやよ。ちなみに押してある紋章はフロンコンスティン家のもので、複雑に見える模様は『叡智』をあらわしていると言われておる。彼もまた、真希少種族の一人じゃ。」

教授はそう遠野に説明すると、茶色の小瓶を取り上げて、手馴れた手つきで蠟をはぎはじめた。

しばらくして小瓶から一通の手紙が取り出された。

教授は手紙を手にとってじっと内容を確認した後、おもむろに顔を上げて楓を見た。

「楓、里帰りじゃ。」

教授がそう言うと、楓は一瞬きよとした顔をしたが、すぐに意味を理解したらしくにつこり笑って、

「はい！」と元気のいい声で答えた。

「なんて書いたあつたんや。」

二葉がいぶかしげに聞いた。

「博士らしく簡潔な内容じゃよ、姉ちゃん。メインの内容は『アルマスの長老に会ってくれ。現地でエルザが合流する』だけじゃ。」

「そ、それだけですか？」思わず遠野が聞き返した。

「うむ。それだけじゃ。詳細は現地でエルザに聞けということじゃ。博士はヒストリアの手がかりを何かつかんだのかも知れんのう。あやつの手紙は大事なときほど短いんじゃ。まったくもって、やたらともったいつけたがる男でのう。」

「エルザちゃんが、来るのね。」懐かしそうな顔で一葉が言った。

「うむ。そのようじゃのう。あと・・・追伸が書いてある。」

教授はそう言つと続いて追伸を読み始めた。

＊追伸 必ず読むように！（一葉さんのいる所で）

『皆さんお元気で過ごすごですか。』

特に一葉さん、元気にしてらっしゃいますか？ 二葉さんはどうでもいいですけど・・・。

一葉さんにお会いできない今日この頃、僕の心には木枯らしが吹いています。

早く自分のメンテナンスを終わらせて、あなたに笑顔を届けにいきます。

昨日庭に白いバラが咲いたんですよ。あなたに見せたかったなあ。。。

一葉さんにとってもよく似合つと思います。今度あなたにプレゼントしますね。

楽しみに待っていてください。！^0^！

今回はエルザが僕の代わりに参ります。あの娘もずいぶん美しく成長したんですよ。

とは言っても、一葉さんの美しさには遠く遠く及びませんが。

どうか僕が会いに行くまでの間、お体をご自愛くださいね。

あなたの笑顔が守られていることをいつも心よりお祈りしています。

ちなみに、二葉さんは、どうでもいいです。

あなたの

ヨハン・フロンコンスティン より』

「追伸・・・めちゃくちゃ長いですね。」

「そういう男じゃ。」

「内容、ほとんどラブレターじゃないですか。しかも手書きで顔文字まで……。かなり痛いですね。」

「うむ。そういう奴なんじゃ。あやつは昔たごさくにしばらく住んでおった次期があつての。その頃からずっと一葉姉ちゃんを女神のように崇拜しておるんじゃよ。それと、エルザというのはあやつの娘じゃ。エルザはあやつと違ってとても素直ないい子じゃぞ。」

教授がそう言い終わった時、二人は教授の隣から立ち昇る不穏な才一ラを感じた。

「あ、あのボケ……！何が、どおでもええや……！ふざけよってからに……！！ここにおった時、あんなけ可愛がったのに、恩を仇で返しよって……！！うちはどおでもええやつて……！！一体なんなんや……！！！」

怒髪天を突くとはまさにこの事であつた。髪を逆立てた二葉が真っ赤な怒りを爆発させた。

「姉ちゃん、あれは可愛がってたって言わねえよ。おちよくってたって言うんだよ。」

五葉がなだめるような口調で言ったが、逆に怒りに油を注いだようであつた。

「なんやて……！」

二葉は五葉を鋭くにらみつけた。

「可愛がってたという表現は、別の意味なら正しいですね。滝つぼに突き落としたり、暖炉に手を突っ込ませたり、後ろから特大ハンマーでおもいっきり殴ってみたり、あと寝てる間に女装させたというもありましたね。」

十が冷静にフォローしたが、全くフォローにはなっていないかった。

「なんやなんや、あんたら！まるでうちが悪いみたいやんか！！」

怒れる二葉から隠れるようにして遠野は小声で教授に聞いた。

「そ、そんな事されてたんですか。」

「うむ。じゃがほんの一部の話じゃ。あやつは姉ちゃんのお気に入りで、可哀そうにかっこうのオモチャだったんじゃないよ。本当によう泣かされとったわ。そんなあやつにいつも優しく接してくれたのが一葉姉ちゃんだったと言う訳じゃ。」

「なるほど。そういう事だったんですね。博士のお気持ちなんとなくお察しできます。」

「こらっ！そこ、なにこそこそ話してんにゃ！」

二葉の怒りが遠野達に照準を定めようとしたとき、一葉がやんわりと止めに入った。

「まあ、まあ、ふーちゃんも皆も落ち着いて。」

一葉の声でピリピリした場の空気が少し和らいだ。

「ふーちゃんはね、ほんとに可愛がってたのよ、ヨハンのこと。だからいっぱい遊んであげてたの。」

一葉はにっこり笑って言った。

（一葉さん、あれを遊んでたって言い切っちゃうんですか！） 遠野は心の中で叫んでいた。

「そつや！うちは遊んだってたんや。」

二葉はフンと鼻を鳴らして答えた。

（二葉さん、お願いですから私とだけは絶対に遊ばないでください・・・） 遠野は心から願っていた。

「ふーちゃん、ヨハンの手紙に二葉って名前、二回もでてきてるでしょ。あの子やっぱり、ふーちゃんの事が懐かしいのよ。恥ずかしがってあんな書き方してるけど、きつとふーちゃんの事、今でも忘れられないんだわ。」

（ナイスフォローです、一葉さん。でも、あなたの名前は5回も出てきてます・・・。二葉さんの事が忘れられないのは、全く違った意味で忘れられないんだと思います・・・） 遠野は心の中で泣いていた。

「な、なんや。そ、そうなんか・・・。」

真っ赤な怒りに燃える二葉の動きが止まった。

「どうでもいいなんて、なんとも思ってたらなかったら普通二回も言わ

ないわよ。」

一葉がダメを押した。

「そ、そーやったんか。うち、全然わからへんかった。さすが、かずちゃんや！ようわかったはるわ、ほんまに！せやけど、十三が言うたみたいにほんま、もったいつけるやつちゃんあ、あいつは。ちゃんと手紙ぐらい正直に書きいな、正直に。なあ。」

二葉の攻撃色が消えていった。そして、最後はにっこりとした満面の笑みを浮かべて皆に同意を求めた。

「そ、そうじやとも。手紙はちゃんと正直に書かんといかんのう。」
すかさず教授がぎこちないフォローをいれた。

「そ、そうだよな。恥ずかしがって手紙書くなってるんだ。」

五葉もさらにぎこちないフォローで教授に続いた。

「ほんまやんなあ。もう、わかりにくいっゆうねん。あははははは！」

二葉は上機嫌になって明るい声で豪快に笑った。

その後、場は皆のなんとも奇妙な笑い声に包まれた。

10・旅の始まり

「ところで十三、いつ出発するんですか。」 十が聞いた。

「そうじゃのう。エルザをあまり待たせてはいかんから、明後日には発とうと思う。」

「わかりました。では、そのように段取りいたしますね。」

「いつも、すまんのう姉ちゃん。」

教授は頭の後ろをかきながら、恐縮そうに十に言った。

「教授、楓さんの里帰りと言う事はコーカサスへ行くんですか。」

「そうじゃ。コーカサス地方の秘境にアルマスの里はある。博士はそこで長老に会えと言つておる。我輩も昔、長老には会つた事はあ
るが、その時は特別何もヒストリアの手がかりになるような話はせ
んかった。じゃが今回はきつと博士が何かをつかんでおるはずじゃ。
長老と話すことで、ヒストリアへの道が開けるかもしれん。」

いつになく教授の眼光がきらりと光っていた。

「私もお供いたします。」

遠野が真剣な眼差しで申し出た。

「ここまでお話をうかがっておいて、行かない訳にはまいりません。さんざん驚かされましたが、今はヒストリアの真実を究明したい気持ちでいっぱいです。自分に何ができるかはわかりませんが、きつとお役に立ちます。どうか、私も連れて行ってください。」

遠野は自分自身の中に沸き起こった『探求』への熱い想いを視線に込めながら教授に懇願した。

「ふっ・・・無論じゃ。君にも付いて来てもらっよ。なにせ君の頭脳は特別製じゃからの。」

教授は一瞬何かを思い出したかのように笑うと、遠野の申し出を快諾した。

「ミオ一緒！おじいさんきつと喜びます！」

楓がくったくのない笑顔でそう言った。

しかし、遠野はその本当の意味をまだ理解してはいなかった。

「失礼します。たごさく特製デザートをお持ちいたしました。」

美弥が丁寧に部屋の入り口で三つ指をついて頭を下げていた。その横にはパティシエの渾身の一撃ともいえる新鮮かつ美しいデザートの品々が置かれていた。

「美弥、SR-71の整備をお願いします。2日後に使います。」

「承知いたしました。十様。」

十の手際の良さは超一流である。十は早速、2日後の出発に備えて飛行機の整備を美弥に頼んだ。

「さあー！デザート、デザート！こつからはデザートパーティだぜ！遠野、おまえの歓迎会なんだからさ、たっくさん食べよ！」

五葉はバシン！と遠野の背中を一発叩いたかと思うと、早速色とりどりのデザートに挑んでいた。

その後、祝宴は笑い声と時折上がる悲鳴を織り交ぜながら、明け方近くまで続いた。

紫式部がたごさくの常連で、ここで源氏物語を執筆して各離れに名前を付けたという話や上杉謙信が実は女性で二葉の大親友だったという話。真希少種族は現在世界的なネットワークを持っていて、たごさくがその中枢の役割を担っているセンターであるという話。実在するヴァンパイアの一族に、獣人の一族の話。途中、教授が二葉に余計な一言を言って、飛び蹴りをくらうなどの波乱はあったが、そのどれもが遠野を驚かせ、彼の好奇心をかきたてた。

中でも最も遠野を驚かせたのは、高峰の一族が持っている高い治癒

の能力だった。遠野の足が擦りむいている事に気づいた五葉が「おれが治してやるよ」と言って手をかざしたかと思うと、一瞬にして傷を治して見せたのである。なんでも自分の生命エネルギーを傷に集中させることで高速に治癒できるらしく、またエネルギーを他人に分け与えることで他人の傷や病気をも治すことができるという。この能力は教授も含めたすべての高峰の一族が持つ能力らしい。

この日一日は遠野にとって、人生で一番長い日となった。

アルマスの楓との出会い、教授をはじめとする高峰の一族、そして歴史の真実。それらすべてが彼にとって衝撃であった。しかし、同時に二葉や楓達みんなとの裏表のない会話は、遠野の心に不思議な安心感と奇妙な懐かしさを与えていた。それは、彼が生まれて一度も体験した事がないはずなのに、どこか懐かしさを感じさせる、自分を素直に表現できる、心と心が自然と触れ合うとても不思議な感覚であった。

この日は、彼が今まで当たり前のように過ごしてきた日常・常識との完全なる決別の日になった。

すべての真実に触れてしまった遠野の人生は、この日を境に新しく始まったのである。

二日後、早朝。

教授と遠野の二人は楓と共にアルマスの里へ向かうため、十が用意してくれた飛行機の前に立っていた。

「遠野君、富士急ハイランドのドドンパというやつに乗ったことはあるかね。」

「いえ、ありません。」

「では、F1マシンに乗ったことは。」

「あるわけではないですか。」

「そうか……。それくらい最初、齒をくいしばらんといかんのじやが……。」

教授はなにやら意味深げにつぶやいた。

「は？なにがですか。」

「いや、これじゃよ。」

教授はそう言うと、十が用意した飛行機を指差した。

「SR-71改、通称ブラックバード。米軍が開発した超音速偵察

機じゃ。通常は一人か二人乗りなんじゃが、これは内部を特別に改造してあつての、六人程が乗れるようになっておる。エリア51で実験的に造られ、眠つておつたものを十姉ちゃんが独自のルートで持ってきたんじゃ。たごさくが保有しておる飛行機の中でも最速を誇つておる。まあ、マッハ3は楽に出るのう。」

「な!?!?!?!」 遠野は言葉に詰まって、ブラックバードを見上げた。

「ベテランの操縦士でも加速時に気を失う事があるらしいが、ま、死にはせんじやろう。」

「な、そ、そんな……。」 みるみる遠野の顔から血の気が引いていった。

「十姉ちゃんのモットーは『時間は有効に使え』じゃ。我輩達をいち早くアルマスの里へ送りたかつたんじやのう。親心つてやつかのう。」

教授はそう言うつと、からからと笑いながら楓と共に飛行機のステップを軽やかに上がつていった。

遠野はただ呆然と立ち尽くしていたが、すぐに二人の重装備をした操縦士がやって来て、遠野の腕を両方からガッチリとつかんだ。

「さ、ご搭乗を。」

「い、いや、まだ心の準備が……。」

遠野は若干の抵抗を試みたが無駄だった。

操縦士達に抱えられ、なかば引きずられるようにして遠野は無理やりブラックバードに引き込まれていった。

間もなく、ブラックバードのエンジンが甲高い唸り声を上げて、一瞬機体をブルツと震わせたかと思うと、その黒い機体は、全長が3キロはあるつかという滑走路を凄まじいスピードで駆け抜け、瞬間に大空に舞い上がっていった。

そして、その後には、遠野の悲痛な叫び声だけが無常にも響きわたっていた。

離陸直後、凄まじいGの洗礼を受けた遠野はブラックバードが安定した巡航にはいつても、まだぐったりとした様子だった。

「まったく、乗り物に弱い男じゃのう。」

教授は呆れ顔で言った。

「そ、そんな問題では・・・ないと、と思いますが・・・。」

遠野は絞り出すような声で返事をした。

楓が冷たく冷やしたタオルを持ってきて、遠野の額に優しくおいて手を当てた。

「あゝ、冷たくて気分が落ち着きます……。ありがとうございます、楓さん。」

よほどタオルの冷たさが気持ち良かったらしく、遠野の声に少し張りがあった。

「まあ、良い。そのままでもいいから、少し我輩の話に耳を傾けてくれ。」

教授はそう言って、ポンポンと遠野の肩をたたくと話を続けた。

「まだしばらくは着かんから、君に二つほど話しておこう。一つは君も気になっておるじやろう、これから会うエルザと父親のヨハン・フロンコンスティン博士についての話じゃ。」

教授はニヤリと微笑みながら遠野を見て言った。どうやら、遠野が強い関心を示す話題であることを良く知っているようであった。

「彼らが真希少種族じゃという事は話したが、彼らの種族について少し話しておこう。実は、彼らの種族は前回の淘汰の時に、そのほとんどが滅んでしまったんじゃ。」

「えっ?!」

「彼らの種族はもと大西洋にあった島に暮らしておつての、大変すぐれた高度な文明を持っておつた。しかし、淘汰の際、大規模な海底火山の連続爆発に巻き込まれてしまったのう、島もろともそのすべてが海に沈んでしまったんじゃ。かろうじて生き残ったのは

たったの三人、それがヨハン、エルザ、サランなんじゃ。」

「たった、三人ですか……。」

「そうじゃ。異変を知った近くの海人族が急いで救助に駆け付けたんじゃが、なんとか保護できたのは、この三人だけだったんじゃ。ただ、この三人も当時、そうとうな重傷を負っておつてのう。なんとか命はつないでおつたが、体の損傷があまりにも大きかった。それは高峰の治癒能力をもつてしても完全な回復は困難なほどだったんじゃ。」

少し憂いを帯びた遠い目をしながら、教授は話を続けた。

「何千年もの長い長い間、深海での眠りによる治療が続けられたが、やはり回復は難しかった。そこで、もともと彼らの種族で最高位の科学者だったヨハンは、今まで培った最高の機械技術と、彼らが独自の方法で産み出した特殊な金属を使つて、新しく自分たちの体のパーツを作ることにしたんじゃ。ほんの少しの使える部位を極力残しながら、機械と残った人体とを融合させる。ヨハンは全く新しい体を作り出し、まず自分で試したんじゃ。そして、その良好な結果から、その後エルザとサランにもその体を与えたんじゃ。」

教授はどこから取り出したのか、缶コーヒーのタブを開けるとスツと遠野に差し出した。

「それって、人造人間。いや、半機械人間になった。ってことですか。」

遠野は差し出されたコーヒーを受け取りながら答えた。

「うむ。そういうことになるのう。じゃが彼らが生き残っていくには、それしか道は残されておらんかったんじゃよ。ちなみに、彼らの種族の名前は、住んでいた島の名前も一緒じゃが『アトランティス』という。」

「!!!」 遠野は持っていたコーヒーを落としそうになった。

「そして、彼らが独自の技術で産み出した特殊な金属こそ『オリハルコン』と呼ばれる伝説の金属なんじゃ。」

「!!!!!!」

遠野は一瞬言葉を失ったが、静かに一度目を閉じると、何かを思い出した様子で、一言一言を噛み締めるようにして言った。

「・・・本当に・・・実在、したんですね・・・。」

遠野は少年時代より、アトランティスの存在を信じていた。ずっと信じ続けてきたアトランティスが『実在した』という事実は彼にとつてなんとも感慨深いものだったのである。

「では、博士やエルザさんはアトランティスの末裔なんですね!」

急に思い出したように、元気な張りのある声で遠野は教授に聞いた。

「末裔ではなく、元住人じゃよ。彼らは生粋のアトランティス人じ

「や。」

「あーそうか。本物のアトランティス人……。いや、エルザさんに会えるのが本当に楽しみですね！」

そう言った遠野の顔は、まるで遠足を楽しみに待つ無邪気な子供のようだった。

11・忍び寄る影

「ミオ、元気になった!」

換えのタオルを持ってきた楓が、張りのある声で話している遠野を見て、うれしそうに言った。

「タオルありがとうございました、楓さん。でも、もう必要なさそうです。なんだか急に元気が湧いてきました。」

そう言うと、遠野は無邪気な笑顔を楓に向けた。

「まったくげんきな男じゃのう、君は。アトランティスが本当にあったと知ったとたんに、元気になりおって。」

教授が、飲んでいた缶コーヒを遠野につきだしながらそう言うと、三人はお互いに顔を見合わせて笑いあった。

「さて、元気になったところでもう一つの話聞いてもらうとするかの。これは、ちと重要な話じゃ。」

教授はそう前置きすると、少し身を乗り出して話し始めた。

「実は、君を不安にさせるわけではないんじゃが。我輩達、真希少種族と我輩達の研究は、常にあるいくつかのグループによって狙

われておるんじゃ。」

教授の顔にはやや険しさがあつた。

「狙われている？　どういうことでしょうか。」

遠野は怪訝そうな顔で聞きなおした。

「うむ。今のマジORITYのこの世界には、世の中を影から支配しておる権力者のグループというものが複数あつての、現在そのグループのほとんどは我輩達の存在を認識しておるんじゃ。」

「真希少種族の存在を知っていると言う事ですか。」

「その通りじゃ。そして問題なのは、奴らが真希少種族の持つ特殊な能力と長寿の秘密を手に入れたがっていると言う事なんじゃ。奴らは過去に何度も真希少種族を捕らえるべく、様々な手段と方法を講じては襲つて来よつた。まあ、それで捕まるようなやつは、ほとんどおらんかつたがのう。かつて中世ヨーロッパで行われた魔女狩りや魔女裁判も、時の権力者グループが真希少種族をあぶり出す為にやったことなんじゃ。」

「すべてを手に入れた人間は不老不死を求める・・・ですか。秦の始皇帝もそうでしたね。」

遠野は納得しながら話しの続きを待った。

「本当に奴らは貪欲じゃ。自分たちの欲望の為には手段を選ばん。」

今のところ我輩達をあからさまに狙ってくるグループは『ニビル』と呼ばれるグループ一つだけじゃが、ほかのグループも隙あらばと言う感じで真希少種族の搜索を続けておる。まあ、奴らの中にも、我輩達に協力的なグループもあるという事は事実なんじゃが……。

教授は半ばため息交じりにそう言った後、話を続けた。

「あと、我輩達を直接のターゲットとはしておらんが、自らを『ライジング・サン』と名乗るかなり狂信的なグループも存在しておつてのう。奴らはなぜか、真希少種族の中でもヴァンパイア一族のみを徹底的に敵対視しておつて、その根絶を自らの使命として彼らだけをつけ狙っておる。」

「ニビルとライジング・サンですか……問題はそうすると、ニビルの方ですね。」

「いかにも。奴らには用心せねばいかん。奴らは『真の歴史』を知らんが、自分たちの歴史が8000年しかないと言う事はすでに知っておる。そして、自分たちのその歴史のルーツこそは、惑星『ニビル』より飛来した宇宙人によりもたらされたと強烈に信じておるんじゃ。」

「……バカですね。」

遠野はそつけなく言い切った。

「……君……よくそんな事が言えるのう。」

教授はのぞきこむようにまじまじと遠野の顔を見つめた。

「なんの話でしょうか。宇宙人なんてありえませんよ。」

遠野はしれつと言いつつ放った。

「まあ、よいわ。ところで、そのニビルじゃが、奴らの恐ろしいところは、何も宇宙人を崇拜しておることではない。奴らの本当の恐ろしさは、その選民的な思想にあるんじゃない。」

「選民思想ですか。自分たちは選ばれた民であるという。」

「そうじゃ。自分達『ニビル』の権力者のみが創造主から選ばれたエリートであり、それ以外の世界中の人間は家畜も同然で、奴らに仕えるために存在する下僕であるという考え方じゃ。」

教授の言葉は少し怒りをはらんでいる様に聞こえた。

「外道ですね。」

「かつ非道じゃ。奴らは何世紀にも渡ってマジョリティの歴史の中で暗躍してきおった。こと大きな戦争と呼ばれるものの背後には、必ずと言っていいほど奴らがからんでおる。奴らは『実験』と称しては戦争を引き起こし、いずれいらなくなる家畜（自分達以外の人間）の排除をいかに効率良く行えるか、そのデータを取っておるんじゃない。また、奴ら自ら作り出した『金融^{かね}』というシステムで世界中のマジョリティを金でコントロールしておるのも奴らなんじゃ。」

「金でコントロールし、いらなくなったら殺す。人を人とも思っていないですね。でも、いらなくなったら、とは一体どういう意味なんでしょうか。」

「ふむ。それは奴らが、自分たちの創造主の再臨を信じておる所に由来する。自分達をこの星に残していった惑星ニビルの創造主が、やがて自分達を迎えに来ると言う思想じゃ。」

「今度は再臨思想ですか。」

遠野はあきれた口調で言った。

「その通りじゃ。その時が来た時、すべての家畜は排除され、選ばれた『ニビル』の権力者のみが、再臨した創造主と共にこの地上と宇宙に新たな世界を造り出す。家畜と呼ばれる大多数の人間は、創造主の再臨の準備を手伝う為に与えられた命であって、ニビルの権力者につくす為だけに存在が許されておる。新しい世界の創造の際には、家畜はすべて消し去られる運命なんじゃ。ちなみに家畜の命をどう使おうと、それはニビルの権力者達の自由じゃ。奴らは、これまでにも『実験』と称した戦争と、計り知れない数の人体実験を平然と行ってきておる。人の命の重さなど、奴らは微塵も感じておらん。自分達以外は人間ではないと思っておるんじゃない。全くもってやつかいな連中じゃ。」

教授の語気にはあきらかに憤りが感じられた。

「本当にとんでもない連中ですね。人間が金融システムによって金で支配されているという事は気付いていましたが、それをコントロールしている権力者がそんな連中だったとは……。正直驚きです。これは明らかに人類に対する冒瀆です、絶対に許せないです。」

そう語った遠野の言葉には、端々に怒りがにじみ出ていた。

「そう、絶対に許せん奴らじゃ。そして、そんな非道な奴らが、我輩達を狙っておるといふ事実を君には知っておいてほしかったんじや。この先、我輩達の行く手にはなんらかの危険が待ち受けておるやもしれん。」

教授はそう言うつまつすぐに遠野を見た。

「そうですか……。でも、望むところです。そんな極悪非道な連中には、私は決して屈しません。どんな危険があろうとも、奴らの野望ごと叩き潰したい気持ちでいっぱいです。来るなら来いです。」

遠野は瞳に闘志を燃やしながら毅然と答えた。

「ミオ、かつこい！」 楓が横で手をたたきながら言った。

「実に勇ましい回答じゃ、遠野君。頼もしいわ。」

教授は楓に褒められて顔を赤らめている遠野を見てそう言つと、いつものように豪快に笑った。

と、その時であった。

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

突然機内のアラームが鳴り響いたかと思うと、コクピットからの緊急連絡が耳に飛び込んできた。

「コクピットより緊急連絡！緊急連絡！」

「後方より未確認飛行物体が当機に向かって急速に接近中です！」

「なんじゃと!？」

教授はにわかに信じがたいといった表情で言った。

「このブラックバードに追いつける機体などほとんど存在せんぞ！
もしか、ニビルか！」

三人は、はっとして互いに顔を見合わせた。

張り詰めたような緊張感が一瞬のうちに三人を包んだ。

「教授、今、通信が入りました！そちらにお繋ぎします！」

コクピットから続いて連絡が入った。

三人の緊張は一気に高まっていった。

誰も身動き一つせず、ただスピーカーのみに耳を集中した。

ガー、ガガガ・・ガー。

「我々の誘導に従え。君達はすでにロックされている。従わない場合は敵対者とみなし即座に撃墜する。これは警告だ。繰り返し我々の誘導に従え。」

かなり低いドスのきいた、軍人らしき男の声がスピーカーから流れた。

「・・・ニビル、でしょうか。」

遠野が不安げな顔つきで言った。

「いや。・・・恐らく違う。奴らは我輩達のことを敵対者とは言わん。」

「では、一体何者。」

「・・・わからん。じゃが、この機に追いついて来れるだけの科学力を持った連中じゃ、恐らく権力者のグループの一つじゃろう。」

教授は、神妙な顔つきでそう答えると、通信用のマイクを手にとった。

「ずいぶん、ぶしつけな要求じゃの。従わなければ打ち落とすのはのう。お前さん方、一体何者じゃ。我輩達は一介の大学の研究者じゃ。お前さん達と敵対した覚えはないぞ。」

教授がそう言うと、すぐに返信が返ってきた。

「単なる大学の研究者がブラックボードに乗っているとは笑わせる。警告はした。1分間の猶予をやるう。選べ。」

相手からの通信は、短く冷徹な響きを残して途絶えた。

通信が切れると教授は、しばし考えたがすぐにコクピットへ連絡を入れた。

「ロックを振り切るぞ。シルバードランスフォーメーション（SBT）の準備をしてくれ。」

「了解しました。着座して安全装置をオンにして下さい。合図でSBTを発動します。」

コクピットからの返答を受けるやいなや、教授の指示で三人はそれぞれのシートに着座し、安全装置をオンにした。頑強な円形状のア

ームが三人の体を包み込んでガツチリとシートに固定し、機内の壁からはクッション性のある泡の様な物が大量に排出され、瞬く間に上下左右の壁と天井、床をまるで雪が降り積もるかのように分厚く覆っていった。

機内は一瞬のうちに雪のかまくらようになった。

「約束の1分間が過ぎた。なんの返答もないようだな。残念だ・・・」

「

通信用のスピーカーから、再び軍人らしき男の声が淡々と言うのが聞こえた。

「後方機より、ミサイル発射を確認！」

コクピットから大きな声で連絡が入った。

「よし、今だ！！SBT発動！！」

教授の合図と同時にブラックバードはブルツと一度大きく機体を震わせた。

かと思うと、次の瞬間、機体を真っ黒に覆っていた表面の断熱パネルが、次々とろこがはがれる様に落ちていき、その下からまぶしい銀色に輝く機体が姿を現したのである。

それはまるで分厚い黒いコートを脱ぎ捨てたかのような劇的な変化であった。

ブラックバードはいま、シルバーバードへと変貌したのである。

まばゆく輝く銀色を全身にまといシルバーバードとなった機体は、重い鎖から解き放たれた鳥のように軽々とした動きでくると宙を舞うと、迫り来るミサイルのロックをいとも簡単にはずし、驚くべき加速を行ってあっという間に大空の点となって消えていった。それは後方機はおろか、放たれたミサイルでさえ一瞬のうちに置き去りにされるほどのスーパースピードだった。

12・ナバロフ

未確認飛行物体の襲撃から15分。

シルバーバードは安定飛行に戻していた。

「ふーっ、ようやく巻いたかのう。」

教授は額の汗をぬぐいながら、安全装置の解除ボタンを押した。

雪のかまぐらのようになって機内を包んでいた白い泡状の無数の球体が壁に吸収されて元に戻っていく。同時に三人をしっかりとシートに押さえ込んでいた頑丈なアームも速やかに収納されていた。

三人はようやく窮屈な束縛から解放された。

「奴らは何者だったんでしょうか？」

アームに固定されていた腕をさすりながら遠野が聞いた。

「うむ。はっきりした事は言えんが、『敵対者』という言葉を使っておったことからして、もしかすると奴らはライジング・サンだったかもしれないのう。いずれにせよ危なかったわい。」

教授はシートからポンと立ち上がると楓のところへ進んで行き、手をとって楓を起こしてやった。

「間違つて襲われたんだとしたら、たまつたもんじゃないですね。なにせ殺されかけたんですから。」

遠野は憤まんやるせないといった様子だった。

「ま、そついう連中じゃ。」

なかばあきらめた様な表情で教授は答えた。

シルバーバードはその後、安定飛行を続けていたが、しばらくしてコクピットから再び連絡が入った。

「コクピットより連絡いたします。只今、ロシア空軍のナバロフ大佐より通信が入っております。いかが致しましょうか。」

「ん?! ナバロフか! つないでくれ。」

教授はどうやらこの空軍大佐をよく知っているらしく、さして驚いた様子もなく答えた。

「こちらはロシア空軍のナバロフだ。高峰十三は乗っているか。」

かなりぶっきらぼうな野太い声がスピーカーから流れた。

「乗っておるよ。久しぶりじゃな、ナバロフ。」

教授は缶コーヒートのプルタブを片手であけながら答えた。

「おー！十三か！久しぶりだ！俺だ、ナバロフだ！」

野太い声が一段と大きく響いた。

「聞こえとるよ。相変わらず図太い声はかわらんのか、お主。」

「図太いは余計だ。美声と言え、美声と！お前も元気そうだな、十三。」

「うむ。なんとかやつとる。じゃがどうしたんじゃ、急に連絡なんぞしてきおって。ロシア領空の飛行許可なら正式にとってあるはずじゃぞ。」

「ああ、実はその事で連絡したんだ。飛行許可は正式に出ているが、お前達が着陸予定だった空軍基地周辺の治安にちよいと問題が発生してなあ。そこから北東約500Kmにある旧空軍施設の方に着陸してほしいんだ。」

「ん！？あの辺りの治安に問題じゃと？閑静な所ではないか。」

「ま、民族がらみでいろいろとあってな。どうしてもというなら、なんとか着陸できるように手配するが、旧空軍施設の方へまわってもらえると正直ありがたい。ほら、美味しい酒の『アクアビット』も用意しておくから！」

「・・・・・・・・・・」

教授の顔が急に険しくなった。

教授は少し考え込んだ表情をした後、すぐに

「そうか！アクアビットがあるのか！それを聞いたら行かん訳にはいくまい。わかった、ナバロフ。旧空軍施設へ降りる事にするわい。なにせアクアビットは絶品じゃからのう。」

と、先程見せた険しい表情とはうらはらに明るい声で答えた。

ナバロフは教授の返答を聞くと、なぜかすぐには答えず少し間をあけてから言った。

「すまないな、十三。では、旧空軍基地で待っている。本当にすまない・・・・・・・・」

ナバロフの野太い声は、先程までとは違って心なしか少し小さいように聞こえた。

「なあに、気にするな、気にするな！美味しい酒をご馳走になるんじや、こつちも最高に美味いつまみを用意して行くわい。期待して待つとれよ、ナバロフ！では、現地で会おう！」

教授は明るくそう言い終わると、ナバロフとの通信を終了した。

教授の表情にまた険しさが戻ってきた。

「どうかしたんですか。」 遠野が教授の顔をのぞきこむようにして聞いた。

「うむ。かなり困ったことになっておるようじゃ。」

遠野と楓の二人を見渡しながら教授は答えた。

「ナバロフは生粋のロシア人の飛行機乗りでの、我輩の信頼できる親友の一人じゃ。その男が『アクアビット』を飲みに来いと言っておる。」

教授は信じられないと言った表情で言った。

「それがどうかしたんですか。」 遠野は不思議そうに聞いた。

「『アクアビット』という酒はノルウェーの酒じゃ。ロシア人は、まず飲まん。ロシア人が飲むのは『スミノフ』や『ストリチナヤ』『ズブロツカ』といったウオッカじゃ。それに『アクアビット』は船乗りの酒なんじゃ。飛行気乗りのナバロフが用意するわけがない。」

「どういことですか。」

「これは隠語じゃ。」

「隠語？」

「うむ。『来てはいけない。来るな』という意味じゃ。恐らくナバロフは何らかの弱みを握られて、我輩達を旧空軍施設に来させるよう脅されておったんじゃない。だから奴はアクアビットを飲みに来いという隠語で我輩達に『来るな、畏だ』と警告したんじゃない。」

「畏！！」 遠野はギョツとしておもわず大きな声をあげた。

「それでは、旧空軍施設に降りると言う事は、畏の中に飛び込むと言う事なんですか。」

遠野はかなり驚いた表情で教授に言った。

「うむ……。遠野君、すまんが少し寄り道をさせてくれ。君には危害が及ばんように、我輩と楓で君を完全に保護するから。じゃからほんの少しだけ付き合っしてほしい。ナバロフには貸しがあるんじゃない。」

普段のどこかユーモラスな表情とはかけ離れた、真剣な眼差しで教授は遠野に答えた。

教授の今まで見たことのない熱い視線を感じた遠野はしばし沈黙した後、口を開いた。

「……。わかりました。きっとナバロフさんは教授にとってかけがいのない親友なんですね。友の窮地に駆け付ける。私もそういう男でありたいと思っています。行きましょう。ナバロフさんを助けに私の事はどうぞお気になさらないで下さい。不肖この遠野、幼少の頃より剣術においても神童と呼ばれてまいりました。私、薩摩示現

流の免許皆伝でございます。自分の身は自分で守れます。」

遠野は自信にあふれた笑みを浮かべながら、瞳に炎を灯らせていた。

「薩摩示現流というと、あれかのう。たしかチェストオー！と叫びながら思いっきり光速の剣を振り下ろすという流派じゃな。」

「はい。いかにもその通りです。私も光速の剣を振り下ろせるようになるまで、何万回いや何十万回も全力の素振りを振り続けました。そして、ようやくその光速の域に達し免許皆伝となったのです。私の渾身の一撃を受けきれぬ者などこの世に存在しないと自負しております。」

「薩摩の一撃目は死んでもかわせ、か。たしかに昔そう言われつつたのう。でもあれって、もし一撃目をかわされたら、次はどうなるんじゃ？」

「え！？……」

意図しない質問に遠野の頭は一瞬空白になった。

「いや、だから一撃目をかわされたとしたら、その後はどうなるんじゃ。」

遠野はいままで全くかわされた後についてなど、考えたこともなかった。

「……………」

遠野は完全に答えに窮していた。

遠野はしばらく黙って考えた後、スツと顔をあげたかと思うと平然とした様子で教授に言った。

「まあ、それはさて置き。今はこの後の対処法を考えることが大切です。」

「いや、だからその後は・・・。」

「その後も前もありません。今置かれたこの現状の打破を第一優先に考えなければ。こんな時にそのような些事に関わってはいただけません。」

「君も強引な男じゃのう。」

教授はなかなば呆れ顔で言った。

「恐れ入ります。」

遠野らしいと言えはきわめて遠野らしい変わり身の早さだった。

「所で教授、ナバロフさんを陰で脅している連中とは、先程襲ってきた連中と同じではないんでしょうか。」

「うむ。その線はかなり濃いのが。我輩達に振り切られてたんでナバロフを使ったと考えられる。恐らくこういう事態を予め想定していて、以前よりナバロフと接触し弱みを握り、何かあったら持ち駒

の一つとして使おうと考えておったんじやろう。」

教授の推測は鋭かった。

「ナバロフさんの弱みとは何なんでしょうか。」

「それは100%人質じゃ。ナバロフという男は、自分の命惜しさに人を売るような安っぽい男ではない。しかし、人の命の為ならば、奴は己の命を惜しげもなく引き換えにする。ナバロフとはそういう男なんじや。そこを利用されたんじやろう。誰が人質に囚われておるのかわかんが、奴の背後には必ず奴が守ろうとしている命がある。それは間違いないと断言できる。」

旧知の友を語る教授の言葉には確かな説得力があつた。

「人質ですか。ではその解放も視野に入れて臨まないといけないですね。」

そう語る遠野の頭の中では、すでに様々な策がめぐっていた。

「楓、がんばります！ナバロフ、とてもいい人です。ナバロフ、私達の結婚とても喜んでくれました。私、ナバロフから結婚式でこれ、もらいました。」

楓はそう言つと、胸元からひとつの小さな木でできた十字架のついたネックレスを取り出した。

それは手作りの木の十字架だった。形こそ無骨だったが、とても丁寧に作りこまれていて、十字架の周りには小さな文字で『愛』『平

和』『自由』など希望に満ちた言葉がぎっしりと彫り込まれていた。

「その十字架はナバロフの手作りなんじゃよ。我輩達が結婚すると知った奴は、楓の笑顔が永遠に守られますようにと、その十字架を作ってくれたんじゃ。でかい図体と野太い声に似合わず、慣れない細かい作業をしおつてのう。結婚式の当日に絆創膏だらけの手で楓にプレゼントしてくれたんじゃ。」

三人は楓の手に置かれたナバロフの手作りの小さな十字架をじっと見つめていた。

「ナバロフ、とても優しい人です。楓、必ず助けます。」

いつも微笑を絶やさない楓の顔は、いつしか強い信念を宿した瞳を持つ表情へと変わっていた。

「私も早くナバロフさんに会ってみたいです。そして、必ず助けましょう。彼の守るべき人と共に。」

遠野が穏やかだが力強い声で言った。

「うむ。」

短く教授が答えた。

三人は互いに顔を見合わせて目で確認しあうと、小さく頷きあった。

しばらくして、コクピットから地上の旧空軍施設の管制塔より着陸誘導の通信が入ったとの連絡が入った。

シルバーバードは銀色の機体を輝かせながら徐々に高度を下げていき、いよいよ罨の待つ旧空軍施設へと着陸態勢に入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3000m/>

高峰教授の探求～アルマスな彼女～

2011年9月29日09時54分発行